

Fate/Pocket Monsters

天むす

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

アーチャー(Fate/stay night) in アニポケ

英霊・エミヤの分霊が仕事中にセレビィと遭遇したよ ↓ 時渡りでアニポケヘトリップしてまった！ ついでにシヨタ化&サトシとシゲルの兄貴分になるぞ！ どうするエミヤさん!? どうなるエミヤさん!? なほのぼの話。

虫食いで不定期に更新しています。

※17/07/07 エミヤの手持ち募集中です。

活動報告(※エミヤの手持ち募集について)にて募集し、抽選検討しています。気が向けばよろしく願います。

2018/03/25 活動報告へ追記。

協力ありがとうございました。

、17/07/07まで行っていた物について。

大変ご迷惑をお掛けしました。そしてご協力ありがとうございました。詳しくは活動報告(※F/PMの再公開・募集について)にて記載しております。

# 目次

## 序章

Fate/Pocket Monsters	1
世界へようこそ	7
初めてのゲット	13
無印	
1話 キミのはじまり	36
2話―a ラブリーでチャーミー	44
2話―b さらば、ポケモンセンター	59
幕間 EMILYAS キッチン	73
26話 タمامシジム危機一髪	80

## 序章

# Fate/Pocket Monsters

人類の「存続すべき」集合無意識——アラヤに召喚されたその守護者は、この時も人間のもたらした破滅の後始末をしていた。

この守護者は、名を『エミヤ』としている。末端ではあるが英霊の座に至った西暦二〇〇〇年代の人間であり、生前は「正義の味方」として慕われ、恐れられた者だ。

世界には主に二つの抑止力が存在し、人類の破滅回避を『アラヤ』、星の生命延長を『ガイア』としている。どちらも世界の継続を維持するものであり、英霊はアラヤ側の抑止力である『守護者』とされ、手段の一つに値する。しかし、全ての英霊が守護者に当たるわけではない、知名度や神性の高いものはガイア側に与するため、必然的に守護者の任に就くのは『信仰の薄い英霊』か『生前にアラヤと契約し、自身を売り渡した者』と限定される形となる。

エミヤはアラヤと契約した元一般人だった。

養父と交わした「正義の味方」になると言う約束を守るために、全ての人々を救うために、己の全てを世界へ明け渡した愚かな男だった。

結果的に、ある意味では正義の味方となったエミヤだったが、彼の望む『全ての者の救済』は叶わぬままであり、それは死後であっても変わってはいない。

何故ならば、エミヤは辿り着いた果てにて、守護者として人間を処理していたからだ。

助けたかったものを殺し、救いを求めるものも殺す。破滅の要因となるその場全てのもを殲滅する。それが今のエミヤ<sup>守護者</sup>だった。

初めこそ、その抗いがたい使命に絶望したが、しかし、今の彼にはそれ以外のものもあった。

嘗てこそ、絶望の果てに自分殺しを試みた。しかしその過程を得

て、エミヤは以前まで抱いていた「答え」を思い出した。

原点を同じくする自分に、己を導いてくれた師に、光輝く憧れし星に、エミヤは救われた。己が歩んで来た道のりは、胸に抱いた志は、決して間違いではなかったのだ、と。

故に、エミヤは守護者であった。

何れにしろ、誰かがやらねばならない役割である。望む形とは違えど、エミヤは得た答えを魂に刻み、頑張っって行こうと誓った。

「……………」

頑張っって行こうと誓った、が——やはり辛いものは辛いことに違いはない。

焼け落ちた森の中、最後の標的を処理したエミヤは構えていた黒い大弓を下ろし、重いため息を吐いた

たまの息抜きとしてアラヤ以外からの召喚に応じることもあるが、それは分霊であって本霊のエミヤではない。永遠に囚われの身であるエミヤは、一種の拷問を受け続けているような状況下にある。硝子の心ながら硝子故に腐らない彼だが、疲れる時は疲れる人間だった。特に、今回の召喚は彼の心に重くのしかかった。

森が焼け落ちたために動物たちの多くは生き絶え、近くに村があったために老若男女を皆殺しにした。ついでにエミヤは猫派だったのだが、当然そんな事は関係なく、一匹残らず猫も殺してしまっている。この場に、生き物は欠片も存在していなかった。

「……………慣れた、と思っっていたが……………」

殺戮は、生前からエミヤの行っっていたことの一つだった。いつしか殺すことに慣れてしまっっていたが、本来の彼は『奉仕体質』と言われめる程のお人好しである。

エミヤの心は、救えなかった命に嘆いていた。

黒く焼けた大木に触れ、その命がとうに落ちていることを実感する。

この森はどうなるのか、エミヤにはわからない。放置されるのか、更地とされてしまうのか。時間に囚われぬ身であれど、先を知ることのできないこの身で、せめてまた緑豊かな世界に戻っって欲しい、と無

責任にも願ってしまおう。

「……我儘な願いかな……」

エミヤの体が引つ張られる。分霊である今の彼が、役目を終えたことよって座へ戻ろうとしているのだ。

「……ビィ」

と、そんなエミヤの前に、不思議な生き物が現れる。

全身は淡い赤色で、球根のような頭に二本の触覚を生やす、小さな羽根を持つそれ。何とも面妖なその生き物は、一見妖精のように見える。

妖精はガイアに属することもあるため、もしかしたら森が焼けたことよって現れたのかもしれない。アラヤ側であるため、あまりガイア側を知らないエミヤはそう予想を立てる。

「ビィ……」

「すまない。私ではどうすることもできないんだ」

妖精はエミヤの周りを飛び回り、焼けた森に触覚を垂らして悲しげな声を上げる。それを見たエミヤは、焼けた原因とは関係ないながらも申し訳ない気持ちとなった。

見たこともない形をした妖精だが、エミヤにはそれがとても美しいものに思えてならなかったのだ。そんな美しいものを傷つけてしまった。そのことがエミヤに罪悪感を抱かせ、妖精へ可哀想と同情してしまう。なんとと言う傲慢か。感情を自覚して、エミヤは唇を噛んだ。

だが、エミヤにできることは何もない。できることとしては、この惨状を引き起こした一つとして、悲しみを生み出す一つとして、清く姿を消すくらいのことだ。

「何処から来たか知らんが、安全な場所に行くといい」

妖精を一撫でし、エミヤは優しく声をかけた。

「……ビィ、ビィ〜！」

「ど、どうした!? 何か嫌なことをしてしまったか!？」

すると、妖精は途端に泣き出した。エミヤは何か不快な思いをさせてしまったのかと慌てるが、妖精はそれを否定するように首を振る。

そこで、不意にエミヤは信じられないものを見た。

なんと妖精が流した涙が焼けた地面に落ちると、そこから瑞々しい草花が芽吹き始めたからだ。

エミヤは知らなかったが、この妖精は『セレビィ』と呼ばれる全く別世界の生き物だった。時を渡る未来の存在であり、セレビィが現れれば豊かな緑が生まれると伝わる、平和の象徴とされる幻の生き物だ。こことは別世界であるが、その伝説に偽りはない。

セレビィの涙を中心に、焼けた森にはどんどんと緑が広がっていく。唾然とするエミヤにも、ここが先まで戦場であったとは思えない程に、見る見る間に自然が覆い尽くしていく。

「これは……一体……」

何が起こったのか。まるで魔法のような光景に全く理解の追い付かないエミヤは、ただただ目と口を開いて眺めるばかりだ。

セレビィは平和の象徴とされる。つまり、焼け野原になったここも、未来では自然に囲まれる平和な土地となっていることを暗示させるだろう。もちろんそんなことをエミヤは知らないが、困惑の次に胸を占めたのは、たしかな安堵だった。

無惨としか言えない程に汚れてしまった森が、元の美しい景色を取り戻している。壊れてしまったものが元に戻っていく。また立ち上がっていく。

セレビィの成したことはエミヤに希望の光をもたらし、その心を癒すものとなっていた。

セレビィは緑に包まれた焼け野原にて嬉しそうに一回転すると、その喜びを分かち合うようにエミヤの胸元にすり寄った。エミヤは抵抗することなくそれを受け入れ、またつるりとしたその頭を撫でてやる。

「すごい……こんなことが、まるで奇跡じゃないか。君は一体、何者なんだ？」

神でもこんな奇跡を成すことができるのか、少なくとも神秘の薄れた現代では不可能と言えるだろう。その不可能を成した存在を、エミヤは心底から称賛する。

異変が森のみならず、自身にも起こっていることにも気付かずに。

「——何だ!？」

その時、不思議な音が響き渡った。

鐘のような、オルガンのような、言い表すことができない、しかし美しい音だった。

それは一度では止まず、二度三度として連続的に起こる。それに呼応するように光の波紋が広がり始め、辿れば、その発生源はエミヤの抱くセレビイだった。

呆けていても、エミヤは守護者だ。直ぐ様異変に気付き、セレビイから距離をとる。

ここで漸く、本来ならとうに座へ戻っている頃であることに彼は気付いた。しかし、僅かに引つ張られる感覚はあれど、未だに座へ戻る気配はない。そもそも、先の奇跡は有り得ない光景ながら、抑止力が働いた様子が全く見られなかった。

この妖精をもとに、何かが起きている。そう確信して警戒を強めるが、そんなエミヤとは反対に、セレビイは小さな手を真っ直ぐ伸ばしてきた。

まるで誘うようなその仕草。断られると思っていないのがありありと窺える。純粹で裏など欠片もない、幼さを思わせるものだった。

それに、エミヤは警戒を解いてしまう。

この妖精は己に害を与えるものではないと、そう思えたのだ。具体的な根拠などない。しかし、確信はある。何故ならば、何よりも優しい、そのエメラルドの瞳。セレビイはただひたすらに、エミヤを愛おしそうに見つめている。こんなに澄んだ瞳を持つものが、何の悪意を抱いていると言うのか。

気が付けば、エミヤも応えるように手を伸ばしていた。

この未知なる妖精の手を取れば、何が起こるかわからない。けれど、妖精の期待に応えたいと、そう思えたのだ。

相変わらずのお人好しか。脳裏で仕方ない、と少女が困った顔で笑う。自分の口角も持ち上がることを自覚し、エミヤは途中から自分の意思で腕を伸ばしていた。



小さく短い指に、武骨で焼けた指が触れる。

やはり——エミヤは納得した。

やはり、これに悪意はない。ただ純粹に、何処かへ己を誘おうとしている。そして、そこに連れられることが、これへ何らかの幸福を与えるのだろうか。

ならば、応えてやらねばならない。

エミヤは光に包まれ、意識を手放した。

## F a t e / P o c k e t M o n s t e r s

気が付くと、エミヤは森の中に居た。

先までの場所とは違い、太い木々がうつそうと生い茂る少し空いたスペース。その地べたに寝転んでいた体を起こし、ぐるりと周囲を見渡した。

見えるのは木々と草花、そしてその間から覗く青空。何処からどう見ても自然豊かな森の中だ。ついでに、エミヤの周りを楽しそうにくるくると舞い踊っている妖精と似た気配が、草木のあちらこちらから感じられる。

やはりここは先の場所ではない。妙な確信に、エミヤはため息を吐く。

少し早合点してしまったか。己で良しとしたことであるが、結果が予想外であったためにハの字の眉を寄せる。

先程は背を押してくれた少女の影は既がない。記録に宿る影と知っていないながらも、その無責任さにも頭が痛かった——否、これは間違いない責任転嫁である。わかっている。こうなったのはすべて己の責任であるのだと。

深いため息が出た。

「……………何処だね、ここは？」

「ルルルビィ〜♪」

思わず問いかけたエミヤに、セレビィは楽しげな笑みを返し、その胸へすり寄った。

## 世界へようこそ

セレビィに満足するまで胸を貸し与えた後、エミヤは漸く膝を伸ばして立ち上がった。その動きに反応するように、周囲で何か動く気配を感じられたが、こちらへ何かしらのアクションをしてくる様子はない。

一先ず安全を確信したところで、エミヤは困り顔となってセレビィと向かい合った。

「きつと君に悪気はなかったのだろうが、厄介なことをしてくれたな」  
セレビィとの戯れで、時間は十分にあった。その間に一体何が起きたのか、事の分析へ当たっていると、どうやら自分は世界を一つ飛び越えてしまったこと、また霊基に負荷がかかっており、回復のために容姿が子どものものになっていること、それから原因不明の要因によって受肉していること、とこの三つに気が付いた。さらにこの分霊の身はアラヤとのパスが極めて細くなっており、あちらからの干渉がほぼ切れていると言える状態だった。

現状を見直し、ため息が出て来る。

「まったく……………なんでさあ……………」

どうしてこうなった。

今までに類を見ない状況に、エミヤは頭を抱えなくなった、と言うより抱えて蹲って思わず昔の口癖を呟いていた。これが彼の大英雄たちならば、何のそで乗り越えたのだろうか、一応元一般人でおおよそ凡人なエミヤには簡単に受け入れられるものではない。

それでも冷静な部分で現状の解析を続けられる程度には、エミヤも修羅場を潜り抜けて来た英雄だ。

嘆いてばかり居ても、事態が解決するはずはない。一端には自業自得が含まれる。ならば仕方ない、と受け入れるのだ先だろう。エミヤは蹲ったまま、今度は今後について思考を働かせる。

パスの問題に関しては、受肉したおかげで魔力の生成が自身で問題なく行われているため、クリアと言えるだろう。そのため現界の維持に支障はなく、またもう少し回復できれば魔術も問題なく使えるよう

になりそうだ。外套類は体の縮小に合わせて裁縫し直されているため、服の心配も一応ない。

元の世界に戻る方法も、アラヤとのパスが僅かでも繋がったままであるならば、こちらも問題ない。この受肉体が朽ちれば、自ずと座へ引き戻されると考えられる。

問題自体は、一応目を瞑れる程度のものだ。気に入らない点を上げれば、衛宮士郎あの未熟者に近い姿になってしまったことだが、2Pカラーであるため、我慢できないことはない……大変屈辱的であり、不満で仕方ないが、ここに八つ当たり相手が居ないため、ぐつと我慢する。

「ビィ〜♪」

「……君は自由だな……」

エミヤの顔前へ、セレビィは木の実を持って覗き込んできた。どうやら蹲った原因を空腹からだと思っただけらしい。

受肉した以上は食事も必要なため、エミヤはその心遣いを無下にすることなく受け取った。

木の実の掌サイズの赤い実であり、見た目的にはリンゴのようだった。しかし、この世界の食べ物がこの世界の物と同じとは限らない。

「まあ、害があつて死んでも、座に戻るだけだしな……」

怪訝な顔で、エミヤは木の実をかじった。

木の実は普通のリンゴだった。

間違いなくリンゴだ。

美味しかった。

「なんと！ 色違いのセレビィとは珍しいの！」

「ビィツ!？」

セレビィによる厳選のなされたリンゴを楽しんでいたところ、その一人と一体の背後から老人の声がかげられた。

その声セレビィは飛び上がるように驚き、手に持っていたかじりかけのリンゴを振り投げる。そして、そのまま慌てて無茶苦茶な方向へ飛び回り、最終的にエミヤの下肢を覆う外套の中へ隠れてしまった。余程驚いたらしい。セレビィの様子を一通り目に納めたエミヤは、

対し、気配で予見していたため、落ち着いた様子で第一住民へ目を向けた。セレビイの投げたリングは冷静なエミヤへ渡り、地面に落ちることなく収まっている。

さて、彼らの背後に居たのは、赤いシャツの上に白衣を纏った高齢の男だった。

ボックス型の肩掛け鞆を軽々と抱える男は、見るからに研究職であることが窺える。鍛えているようだが、戦闘向きではなく体力面を重視したもののようだ。鋼の目でそう検分し、エミヤは男を無害だと判断した。

(……しかし、どこかで見た……ような……?)

「……君は、」

はて、何処で見ただろうか？ 首を傾げたエミヤを見て、男は驚いたような表情をつくる。だか直ぐに首を振ってそれを払拭すると、近付いても構わないか、と訊ねてきた。

エミヤは外套下のセレビイを確認し、頷いて応えた。いくら弱体化しているようと、たかだか人間一人に遅れはとらない。何かあっても対処できるだろう、と判断していた。

「初めまして、じゃな。ワシはオーキドと言う。マサラタウンでポケットモンスターの研究をしている博士じゃ。君はエミヤくんかね？」

「……何故私のことを知っている？」

告げてもいない名前を言い当てられ、エミヤは問いに問いで返した。

「なーに、何もおかしなことではない」

エミヤの反応を予想していたのだろう。オーキドは茶目つ気あるウインクをする。悪意は感じられない様に、エミヤは警戒せず——構えを取らずとも対処できるだろうと思わせる程に、オーキドは敵意を感じさせず、またそう言った姿勢ではなかった——オーキドの言葉を待った。

「君にとっては未来で、ワシにとっては過去で、エミヤはワシの友人なのじゃよ」

F a t e / P o c k e t M o n s t e r s  
ポケットモンスターの世界へようこそ

「その子は『セレビィ』と呼ばれる個体での、時渡りポケモンと呼ばれる幻の生き物じゃ。普通は黄緑色なのじゃが、君のは所謂『色違い』とされる希少な個体だ」

「セレビィ?」

「ル!」

「森の守り神とも平和の象徴とも言われておる。セレビィが現れれば緑が生い茂る、という言い伝えからじゃの」

オーキドの説明に、エミヤは漸くなるほど、と頷いた。

時渡りをする前、セレビィは焼け野原を緑豊かな森へと戻して見せた。あれはセレビィの能力から起きた奇跡だったのだ。抑止力が働かなかったのは、それを能力として認められた存在であるためだろう。だからエミヤを連れて世界を飛び越えることもできた。

疑問は残るが、絶対に有り得ない仮説ではない。一応は納得したエミヤの腕の中で、セレビィは御満悦な鼻唄を歌っていた。

「ワシも若い頃に時渡りに巻き込まれてな、その時に君たちに出会ったのじゃ。同じ境遇のワシを気にかけてくれて、君の事情もその時に聞いたよ」

オーキドの説明に、エミヤはなるほど、と頷く。話しそうだ、と己のことながらに思ったのだ。

きつと当時のオーキドは、突然知らない場所に放り出されて不安だったはずだ。そんな不安定な子どもをこのお人好しが放っておくか。いや、するはずがない。

ぼろつと自分も時渡りをしたこと、加えて言っても支障がないから、と世界まで飛んでしまったことを話しそうだ。

「身寄りも何もなからう? 是非ワシの所に来るといい。ワシと君の仲じゃ。遠慮は要らんぞ」

「さつき会ったばかりの人間に言う言葉ではないぞ」

「言ったじゃろ？ エミヤはワシの友人だよ」

歩きながら話していると、エミヤたちは一通りの整備がされた道に抜けた。その上には一台のジープオープンが停まっております、オーキドはそれに乗り込むとエンジンを回した。

「立ち話もなんじゃ。一先ずワシの家まで行こう。答えはそこでじっくり考えるといい」

「実質同じだろう……」

と言いながらも、エミヤは助手席に乗り込んだ。

エミヤがシートベルトをしてセレビイを抱え直すと、オーキドは地図版の地図を渡した。

「今居るのがこのトキワの森で、ワシの家があるのはこのトキワシテイを越えたマサラタウンじゃ。大体時間にして二時間くらいかかるな」

大きく切り取られた土地の上をオーキドの指がなぞり、それをエミヤとセレビイの目が追う。

地図は日本の関東地方とよく似ており、当て嵌めるとおよそ東京から神奈川へ下る動きだった。

まじまじと地図を眺めるエミヤの横で、オーキドはアクセルを踏んだ。ジープの加速に連れ、森の景色が後ろへ流れて行く。

不意に、エミヤの視界に黄色いものが掠めた。

厭に興味を引くそれを見ようと振り返る、が捉えられたのは草むらから生える黄色いギザギザしたものだけだった。

やはり見覚えがある。この世界に来てから引つかかる疑問を残し、エミヤはトキワの森を去った。

オーキド邸は、一言で言えばただっ広い所だった。

自宅と研究所が一緒になっており、風車がトレードマークな建物はやや大きい程度のもだったが、何よりも敷地面積が広い。研究所の向こうに見える山々全てがオーキドの持ち物であり、世界中の研究所で一番広いかもしれないと言う。

オーキドはポケモン研究の第一人者であり、世界中で注目される博士だった。故に研究に適した環境を求めたその熱心が施設に表れ

ており、訪れる者へありありと知せていた。

「……………」

エミヤは絶句していた。

別に予想以上にオーキド邸が大きく、オーキド自身も凄い人物であることが原因ではない。この研究所の庭に居るものに唾然とせざるを得なかったのだ。

窓から見える景色には、大きな花を背負う恐竜や舌の長いピンクの生き物、果てに岩の塊の蛇などと、見たこともない生物が和やかに過ごしていた。キメラでもゴーレムでもない。全くの一個とした新生物が、当たり前前のように存在している。

窓にへばり付いて食い入るように生物たちを見つめるエミヤの前に、見覚えのある黄色が入り込んで来た。

ウサギのような長い耳に、ギザギザの尻尾。頬にはそれぞれ赤い丸が浮かび、時たまそこでバチバチと電流が走っている。

それを見て漸くやっと、エミヤはこの世界を理解し、引っかかっていた疑問の答えに辿り着いた。通りで既視感を覚えるはずだ、と。そしてよく覚えていた、と自分を褒めたい気分にもなる。

これがエミヤではなく世話焼きな後輩の義兄であれば、セレビィを見た時点で気付いたことだろう。いや、あのワカメでなくとも、電子ゲームに触れたことのある者であれば大抵が、少なくともオーキドと出会えば辿り着けない方がおかしい。

「そうじゃ、まだ言っておらんんだな」

来客用のテーブルに緑茶を用意しながら、オーキドはエミヤに不敵な笑みを浮かべた。それは面白がるようで、イタズラの種明かしをする子どものような表情であった。

「ポケットモンスターの世界へようこそ」

ここはポケットモンスター、縮めて『ポケモン』と呼ばれる生き物たちが、時にペットとして、または勝負の手段として、人と共存する別世界である。

## 初めてのゲット

オーキドの淹れた緑茶は、美味しくはないが不味くもない物だった。それをお供にこの世界の話について一通りした後、エミヤは改めてオーキドの世話になることを了承し、頭を下げた。

別世界からの異邦人など厄介者以外の何者でもなかりうに、それでも「友人だから」という理由だけで援助してくれるのだ。オーキドの言う『友人』とエミヤが同一人物であるとも、また自分が彼の言う通りに未来でオーキドを助けるとも限らないにも関わらず、だ。エミヤは自分を棚上げてそのお人好しを少々心配した。

当然、このエミヤの心配は杞憂であり、数年後には『友人』と同じように世話を焼いたりするが、それはまた別の話である。

「それで、だ。世話になるにあたり、早急に手を打たなくてはならない課題が発生した」

「なんと！ ワシにできることがあれば何でも言ってくれ」

面を上げたエミヤが厳しい顔をしているのに連れられ、オーキドも表情を引き締める。

エミヤはオーキドの反応に一瞬喉を詰まらせるが、湯飲みに残った緑茶を一気に飲み干すと脇に置いていた物を手に取った。ジープからそのまま拝借してきたカントー地方版の地図だ。

その地図を広げ、オーキドとの間にあるテーブルに置く。

「字がまったく読めん」

「……………」

「……………」

セレビイとオーキドから向けられた同情のような視線に、エミヤは耐えられず顔を背けた。

## 初めてのゲット

会話での疎通が可能であった点を踏まえ、音の捉え方が同じだろ



う、と考えたエミヤたちは、研究所の書斎へ場所を移していた。

セレビイは疲れてしまったようで、書斎には付いて来たものの日当たりの良い窓辺へと寄って行き、そこで丸くなってお昼寝をしている。そんな可愛らしいポケモンの姿に癒されながら、エミヤはオーキドの読む音を聞き漏らさないように文字を追っていた。

「こんにちはー！」

「あ、こちらっ！」

しかし、悲しいかな。英霊であるなし関係なく、エミヤは生前から取り分け学校の成績が良かったわけではない。漢字のようでまったく見たこともない文字を学ぶのはなかなか難しく、久方の勉強に悪戦苦闘していると、部屋の外から元気な声が聞こえてきた。思わず、エミヤは文字列から顔を上げる。

人数は二人のようで、軽い足音が忙しそうに走っている。どうやら玄関から庭へ抜けられる研究室へ向かっているようだ。

オーキドもエミヤが扉の向こうを気にかけてたことで気付いたようで、それから時計に視線を移し、「そろそろ休憩にしようかの」と参考書を閉じた。時計の長い針は既に、書斎に籠ってから一周以上回っていた。

「近所の友人と孫が帰ってきたようじゃ」

「庭に出ようとしているみたいだが」

「あの子たちなら大丈夫じゃよ。そうだ、君を紹介してやらねばならんなー！」

そう言つて、オーキドは止める間もなく書斎から出て行く。何が楽しいのか、随分とご機嫌な様子だ。

「……まあ、仕方ないか」

エミヤはこの世界の住人でないことに加えて、とうにその生を終わらせた死者だ。いつまでこの世界に居られるか、自分でもわからない。そのため生者との関わりを必要最低限に抑えるつもりでいた――が、現状はそうも言っていられなくなってしまった。

自立には言語の理解が必要最低限であり、この世界はエミヤの居た世界と共通する所もあれば、まったく違う所も思う以上に多い。オー

キド邸の世話になるのは、当初の予定より長くなるだろう。

「となれば、無関係で居続けるのは得策ではないな。セレビー」

エミヤも本を閉じて席を立った。そして窓辺にてすやすやと夢の世界へ飛んでいるポケモンに声をかける。しかしセレビーに起きる気配はなく、気持ち良さそうに寝息を立てるその姿に眉を下げたエミヤは、頭を一つ撫でてやると起こさずに扉を潜って行った。

ぽつりと残されたセレビーは、誰も居なくなった部屋に陽気な寝言を呟いてコロリと転がった。

「エミヤ、こつちだ」

研究室へ入れば、庭に出る扉からオーキドが顔を覗かせていた。どうやら既に庭へ移動しているらしい。

エミヤにとつて未知の生物が闊歩するそこは、少々ハードルが高い場所であるが、この世界は何処もかしこも似たような所ばかりだ。慣れが肝心、と誤って攻撃しないよう決意し、エミヤはポケモンたちの庭へと一歩踏み出した。

「紹介しよう。孫のシゲルと友達のスートシジャ」

オーキドが紹介した子どもたちは、庭の芝生の上に座り込んでいた。見れば、その手元にはブラシが握られており、子どもたちとそう変わらない大きさのポケモンにブラッシングをしている最中だった。

「博士、誰こいつ？」

「見ない人だね」

不思議そうに首を傾げる子どもたち。黒髪の少年がサトシで、茶髪の少年がシゲルと言らしい。どちらもエミヤより小柄であり、小学生低学年くらいだろう。

正直エミヤは少年たちの手元にいる大きなネズミのようなポケモンが気になって仕方なかったが（何せ大きくて丸くて毛むくじやらで出っ歯で丸くて毛むくじやらで大きいネズミだ）、それを訊ねてはこの世界の住人として不自然に思われる。後でオーキドに訊こう、と無理矢理に思考を切り替え、彼らと同じように芝生に膝を付いてから口を開いた。

「彼はカイガイ外から来たワシの友人じゃよ」

「わた……おれ……あー……、私はエミヤと言う。今日マサラタウンに来たばかりでね、暫く博士の元で世話になることになったんだ。よろしく」

一人称で迷ったが、結局他所行き用の「私」で通すことにしたエミヤに、少年たちはますます不思議そうに首を傾げた。

「マサラタウンに来たって……もしかしてポケモントレーナー？」

「マジで!? なあなあエミヤ! ポケモン見せてくれよ! 海外のポケモンなんて初めてだ!」

シゲルの問いに反応したのはサトシだった。サトシは勢い良く腰を浮かせ、ずいっとエミヤに顔を寄せる。

エミヤは困った。つい数時間前にこの世界に来たばかりの彼は、当然ながらポケモンを持ち合わせて居らず、またポケモントレーナーでもない。セレビィが居たら誤魔化したかもしれないが——セレビィは幻のポケモンで知名度が低いため、子ども相手に誤魔化す手段には適しているだろう——あのポケモンは書齋に置いて来てしまった。

「彼はまだポケモンを持って居らんよ。これからスタートする初心者じゃ」

「なーんだ、つまんないの」

「ふーん、大したことないんだ」

「……………」

子どもとは容赦がない。

オーキドの助け船にホツとする間もなく、少年たちから容赦ない言葉が飛んでくる。これにはエミヤも何とも微妙な気持ちを抱いてしまう。

この世界には『小学校卒業みんなが大人法』通称『小卒大人法』と呼ばれる法律がある。小学校は十歳までであり、義務教育を終えれば成人扱いとなる。中学校からは任意教育へと切り替わり、より学びたい者は進学を、やりたいことがある者はそれぞれの道へと進んで行ける法だ。そのため見た目年齢と海外からの単身での旅行から、彼らは既にエミヤが成人済みである、と看破していた。一応、元でもこの世界でも、エミヤは成人などとうに越えているため間違っではない。

そんな自分たちとは違い成人済みの海外から来た少年が、ポケモンも連れていない駆け出しの新人トレーナーなのだと思えば、彼らの落胆も頷けるだろう。何せ彼らもポケモントレーナーを目指す身であるのだから。

「エミヤ、休憩ついでに散歩でもしてきたらどうじゃ？　書齋に閉じ籠ってばかりでは息もつまらさう」

「じゃあオレが案内してやるよ！　オレ、この庭のことならなーんでも知ってるんだぜ！」

「なっ!?　ボクの方が知ってるに決まってるだろ！　ここはおじいちゃんの庭でボクの家だ！　ボクが案内する！」

「オレが案内する！」

「ボクだ！」

「オレだ！」

どちらがエミヤを案内するか、でサトシとシゲルがいがみ合う。その小さな争いを、置いてけぼりなエミヤはポカンと眺め、オーキドはやれやれと肩を竦めてため息を吐いた。

「……えつと……」

「いつもこうなんじゃ」

マサラタウン名物のケンカコンビ。それがサトシとシゲルだった。ケンカする程仲がいい。その典型的な例である。

「……じゃあ、二人共に頼もうか？」

一頻りケンカした後は、結局エミヤの一言によりサトシとシゲルの二人に案内してもらうことで落ち着き、少年二人の後ろを付いて散歩に出かけることとなった。

こちら、と後ろを振り向けば、もう随分と研究所が小さくなっていく。広場だけでも広大な様に、一体地価幾らなのか、とエミヤは要らないことを気にしてしまった。

「あれがナゾノクサ。あれも初めて見るの？」

「ああ、私が暮らしていた所ではあんな生き物は見たことがない」

「カントーじゃメジャーなくさタイプのポケモンだよ。その辺の草むらに入っただけで野生がわんさか出てくるから」

サトシがポケモンを指差し、シゲルがその解説をする。しよつちゅうケンカする割には、いや、ケンカしているからこそ、互いのことを良く理解しているのだろう。無意識にやっつてのけるコンビネーションに、エミヤは微笑ましいものを見ている気持ちになる。

喩え十歳に満たない子どもにもタメ口を利かれ、呼び捨てにされようと、エミヤは気にしていなかった。元々自己評価が極端に低いのもあるが、もう随分と長い時間を過ごしている。こんな小さな子どもたちにも意気地になる心の狭さは持ち合わせてはいない。

つまり、久々に触れ合う子どもと言う存在に、大層エミヤは癒されていた。

殺すか殺されるか。そんな場所に慣れ過ぎて、当たり前前の触れ合いを久しく忘れていたのだ。この世界で凶らずとも得た“生”に拘らずに居たが、もう少し長居できるように凶るのもいいかもしれない。以前までなら考えられなかった自身への欲望を、エミヤは自覚して苦笑いが溢れた。

「今度は岩場エリアに行こーぜ！」

「先行くなよ、サトシ！」

森の入り口まで来れば、サトシが我先にと駆け出して行く。それを負けじと追いかけるシゲルに続き、エミヤも彼らに倣った。

「それにしても、ここにはこんなに様々なポケモンが生息しているのか？」

くさタイプとみずタイプの争いが勃発していた水場エリアを回って、辿り着いた岩場エリア。ここまで回って来た場を見たポケモンでも、既にその数は三十種を越えるだろう。

オーキド邸の庭に、あまりに生息地が固まっていることに首を傾げれば、シゲルが首を振ってそれを否定した。

「違うよ。ここに居るポケモンは半分くらいがトレーナーの保管ポケモンなんだ。トレーナーはポケモン自然保護法で手持ちが六体って決められてるから、溢れた子たちは研究所に預けられるんだ」

「そうなのか」

「そんなことも知らずにポケモントレーナーやってるの？」

「……あー、あれはなんていうほけもんなんだー」

書齋で文字の勉強をしながらこの世界について学んで居たが、それでも全ては入り切っていない——と言うより、法律などの常識は盲点であった。オーキドも今更な知識であり、あまりにエミヤがポケモンに対して無知であったため、そちらをメインに教材として居たのだ。故に、エミヤはこの世界では子どもでも知っていることを知らなかったりする。

シゲルのじと目から逃れるように明後日の方を向き、エミヤは話題を無理矢理変えた。下手な嘘より黙秘の方がボロを出さないで済むこともある。

「おーいー。上がってこいよー」

シゲルがニドラン♀の説明をしていると、頭上からサトシの声が聞こえてきた。この岩場エリアには剥き出しの地面や岩石が多く、山に沿っているため崖もある。つまり、エミヤの真横には崖がある。その頭上と言えば、それは崖の上しかないだろう。

エミヤが慌てて見上げれば、サトシは絶壁を登り終えてこちらに手を振っていた。この崖の周辺には登れる様な場所はなく、上がるには迂回しなくてはならない地形となっている。となれば、サトシは一人でこの崖を上ったことになる。それもエミヤに悟られない内に、危なげなく上手に。

エミヤの頭に「野生児」と言うワードが浮かんだ。あながち間違っではない。サトシはマサラタウンでも飛び切りのポケモン好きであり、時間があればよく草むらや森の中へと潜り、ポケモンたちと遊んでいるような子どもだ。並大抵の身体能力を有していない。

しかし、それはサトシだけには留まらない話だった。

「だーから、先行くなつてー」

何と、シゲルまで当然のように崖に手をかけ、するすると登り始めるではないか。

十メートルとまではいかないが、それでも三メートル強ある壁のような崖だ。そんな足場の悪い場を、シゲルは苦もなく進んで行く。

「何やってんの?」

「それは私のセリフなのだが……」

シゲルが崖の頂上に手をかけたところで、未だ天を仰いで登って来ないエミヤを不思議そうな顔で見下ろしてくる。エミヤは頭痛がするようだった。

これがこの世界の常識なのか。子どもの体力恐るべし。

一応断っておくが、この世界の子どもでもここまでパワフルな類は稀であり、将来的にスーパーマサラ人と称される彼らはとても珍しいことをここで断っておく。車の底に工具もなく張り付き、ドライブできる約十歳なんて何人も居ては人類のハードルがインフレしてしまう（それでもサトシと言う個体は希少中のレアであるのだが）。

閑話休題。

エミヤはシゲルが見えなくなったところで、漸く崖に手をかけた。

子どもが危ないことするな、怪我したらどうするんだ、と説教の一つや二つ言っただけでやりたいところだが、それは彼らに追い付いてからでもないだろう。

シゲルの登った位置には比較的窪みが多く、一応足場と言える物が続いている。それらの配置を確認し、エミヤは一つ頷くと——一気に駆け上がった。

表すならばクラウチングスタートに近いだろう。当然ながらまったくの別物であるが、エミヤのイメージはそれであった。

やったことは至極単純なことである。両手の指先を窪みに添え、利き脚の駆け出しに合わせて勢い良く体を押し出したに過ぎない。そして崖と水平に空中へ投げ出される形となるが、速度が落ちる前に反対の膝を上げ、次の窪みに爪先を引っ掻ければ、後は頂上に辿り着くだけだ。弱体化してしようと、エミヤは英霊である。そもそもその身体能力からして人間と比べるものではないだろう。

たった一步で崖を登り、頂上に着地したエミヤは、さてと、とサトシたちの方を見た。エミヤが無駄に身体能力を活かして駆け登ったのは、完全に見失う前に追い付き、少年たちに説教をするためだ。危ないことをしたならば、すぐにそれを訂正しなくてはいつまでも直らない。当然のようにあんなことをしていたのだ。周囲の大人は注意

していなかったのか、もしくは知らなかったのか。どちらにせよ、今の場にいる年長者はエミヤだ。ならば、それをするのは彼の役割だろう。

「……………子どもとは凄いな……………」

しかし、エミヤの前には誰も居なかった。

サトシも、シゲルも、ポケモンも、何も居ない。あるのはうっそうとした森のみ。

何とあの二人、エミヤが登り切る一瞬の隙に、何処かへ行ってしまうたのである。

恐るべしマサラの生んだ超人の原石たち。呆然とするエミヤの頭上で、彼の心象を表すように、雲が太陽を隠していた。

「つかまえた!」

サトシは目の前を跳ねるように進んでいたニョロモを両手に抱え上げた。ニョロモはそれを嫌がる様子なく、大人しくその小さな腕の中に収まっている。

このニョロモを始め、このマサラタウン付近の小型ポケモンとサトシは比較的仲のいい遊び相手同士だった。特に研究所を出入りするポケモンたちは賢いようで、無闇に子どもに対して攻撃してくることは少ない。勿論機嫌が悪かったり、嫌がることをすれば、彼らは子どもだろうと容赦なく攻撃してくるが、この時は大人しく遊び相手になってくれる程度にはご機嫌な様子だった。

「サートシくんは、まともに散歩もできないのかい?」

「シゲル!」

嫌味の乗った声に、サトシはニョロモを放して振り返る。見れば、シゲルは木にもたれ掛かかり、呆れ顔でサトシのことを見ていた。

「だってニョロモが遊ぼうって」

「ポケモンのせいにしてない。どうせサートシくんは、ボクらのこと忘れてたんだろう?」

「わ、忘れてなんか……………」

正直、忘れていた。

サトシはシゲルたちが登って来るのを待っている間、近くを通りか



かったニヨロモに興味が移り、崖下二人のことなど忘れ去ってしまったのだ。そのためこんな森の奥までの追いかけてここに没頭してしまっており、シゲルの言葉に返すものがない。

だが、だからと言ってこのまま黙っているのも負けたようで悔しい。サトシはビシツとシゲルを指差した。

「シゲルだつてエミヤのこと置いて来てるじゃないか！」  
「ぐうっ！」

実はシゲル、善意や揶揄いのためにサトシを追いかけて来たのではない。彼も彼で好奇心に任せてここまで来た一人だった。

シゲルはサトシのことを大変気に入らないし、見下してもいて、周りの大人たちに「友達同士」と認識されようと、絶対に認めないと思っている。しかし、このマサラタウンではシゲルに付いて来れる唯一の子どもであり、シゲルがオーキド邸に住むようになってから続く付き合いで、サトシの人柄やら行動をよく知っている。つまり、サトシに付いて行けばポケモンと出会えることもよくよく知っていた。だからサトシを追いかけて来たのである。

互いにお客さんを置いてけぼりにして来たことを指摘し合い、ついには取っ組み合いにまでなった。

「だいたいいつつもサトシは勝手に行きすぎなんだよ！」

「シゲルがちんたらしてるのが悪いんだろ！」

「ちよつとはまわり見ろよバカ!!」

「バカって言う方がバカなんだぞ!!」

地面に転がって、サトシとシゲルは服を引っ張ったり張り倒したりする。そのあまりに元気なケンカに、ニヨロモは逃げ出してしまい、もうここから居なくなってしまった。

誰にも止められない二人だったが、小さなきっかけがその手を止めた。

「あ、雨だ！」

ポツリ、ポツリ、と水滴が二人の顔を跳ね、どんどんその量を増やして行く。

直ぐに土砂降りとなった天気には、慌てて二人は走り出した。

「あつた！ 洞窟！」

彼らが向かっていたのは近場の小さな洞窟で、その中に競うように駆け込んで行く。

洞窟は深いものではなかったが、影にあるためか、奥まで光が届かず薄暗い。

「シゲルのせいだからな」

「サトシのせいだろ」

入り口付近で止む気配のない雨を見上げ、二人は互いを睨み合う。そして鼻を鳴らし、互いに顔を背けた。

さて、とても困ったのはエミヤだ。

「え？ まだ戻らないのか？」

サトシとシゲルに置いて行かれ、とりあえず探すも気配が多過ぎてまともに追いかけることができずに居たところ、追い討ちのように雨が降ってきた。その雨足から直ぐに土砂降りへ移るだろうと予想し、子どもたちも帰ってくるだろう、と来た道を辿りながら一旦研究所に戻ったエミヤは、起きていたセレビィにビンタされた。とりあえずオーキドにはシャワーを浴びるように進められ、暫くしたら子どもたちも戻って来るだろう——サトシもシゲルも、オーキド邸の地形を熟知している上、何せあの身体能力だ。この雨程度では無事に戻ってこられると考えられる——と聞いていたのだが、シャワーを浴びて紅茶を淹れても、サトシとシゲルは研究所に帰って来ていなかった。

緑茶に比べてしっかりと香り立ち、上品な甘さの紅茶を飲みながら、オーキドは重苦しくエミヤに頷く。

エミヤが戻って既に一時間近く経っていた。

「あの子たちなら問題ないだろうと思っていたが、何かあつたのかもしれんな」

窓から外を見れば、雨足は落ち着いてきている。雨のピークは過ぎたようだ。

「……探しに行ってくる」

「うむ、ワシも行くぞう」

「いや、博士はここに居てくれ。もしかしたら入れ違いになるかもし

れない」

「ならハナコさんと呼ばう」

「ハナコ？」

「サトシの母親じゃ。彼女なら安心して任せられる」

オーキドはカップをソーサーに戻し、電話をかけたにソファアを立つ。エミヤはそれを待つことなく、セレビイを連れて外へと飛び出した。

「少し走る。しっかり掴まっている」

「ルリ！」

セレビイはエミヤの言葉に頷くと、肩の外套を力強く掴んだ。その感覚を認めたエミヤは、足に強化魔術を回して地を蹴る。

途端、エミヤの姿が掻き消えた。彼の様子を窺っていた雨宿り中のポケモンたちが目を見開く。あまりの速さに、常人の目で捉えられる速度を越えたのだ。しかし、その場を見れば、エミヤが先までいた証である子どもの足跡がくつきりと残されていたことだろう。

さて、強化にて加速したエミヤは、真つ直ぐに岩場エリアへ向かっていた。子どもたちを見失ったそこから搜索を再スタートするためだ。

「……たしかこの辺りだったな」

岩場エリアのサトシとシゲルを見失った場所まで戻って来て、エミヤはぐるりと周囲を見渡す。

因みにセレビイはエミヤの腕の中でぐったりしており、少し気持ち悪そうにしていた。

「大丈夫かね？」

「び、びい……」

しおしおと触角を垂らしながらも、セレビイは親指(?)を一本立ててエミヤに応えた。雨にしっとり濡れたその姿は、何とも哀れみを感じさせる。

「すまない。次は気を付けよう」

「びいびい……——ビイっ!？」

「何だ!？」

その時、まるで地震のような揺れが起こった。  
いや、「ような」ではない。地震そのものが起こったのだ。

「これは……ポケモンの技か！」  
「ルルリー！」

セレビイは急に体を起こすと、慌てた様子でエミヤの外套を引つ張った。まるで何処かへ案内しようとしているようだ。

「どっちだ？」  
「ビー！」

意図を読み取り問えば、セレビイは森の奥を指差す。するとまるでSF作品に出てくる怪獣を思わせる雄叫びが聞こえてきた。

エミヤはそれを聞いて顔をしかめると、舌を打ってセレビイを抱え直し（今度は優しく胸元に寄せた）また走り出した。

「うわあああああつ」

サトシとシゲルは悲鳴を上げて逃げていた。その姿は何処もかしこも泥だらけで、手足には擦り傷も付いている。それらはどれもケンカとは別の原因によって付いたものだった。

二人が走り抜けた後を、重い足音が追いかけて来る。

草木をへし折り、遮るものを薙ぎ倒し、それは彼らを追いつめて来る。

「グオオオオオッ」

雄叫びを上げるそれはサイドンだった。

正に怪獣と言わしめる見た目。さらに全身が鎧のような分厚い皮膚で覆われており、額には鋭い一角が生えている。全長二メートル近くあるその巨体に追いかけられれば、誰だって逃げ出すことだろう。

「サトシが尻尾踏むから！」

「シゲルが押したんだろ！」

走りながらも叫ぶ元気はあるようで、木々を避けながら並走する二人は、器用にも罵り合って進んでいる。

説明するまでもないだろうが、状況はサトシとシゲルのケンカがまたもや勃発し、洞窟の奥に居たサイドンを巻き込み、そして怒らせてしまつて逃げている真つ最中だ。さすがに非が自分たちにあること

などわかっている二人だが、大型ポケモンに子どもが敵うわけも、また話を聴いてもらえるわけもなく、ただただ必死に逃げるしかない現状である。

「グオツ！」

「うわっ!?!」

「ぐえっ!?!」

突然サイドンが動きを止めたかと思えば、大きく地面が揺れた。じめんタイプの技「地震」だ。

二人の体は揺れに耐えきれず大きく浮き上がり、揃って泥の地面に突っ込んでしまう。

その間にすぐ傍まで近寄って来たサイドンは、鋭い眼光で二人を見下ろした。

「————っ」

サトシとシゲルは、声が出せなくなってしまった。

研究所で大型のポケモンは何体か見たことがある。だが、ここまで大きな個体は、さらに敵意を向けられたのも初めてだった。

「グオオオオオオオオツ!!!」

鼓膜が破れんばかりの雄叫びに、短く息が引き攣った。

ああ、ダメだ。このままではやられてしまう。

二人の脳裏に自分たちの未来が通り、思わず血の気が引く。

体は竦んで動かない。

声は震えて出てこない。

逃げ切れな——

「ニョロー！」

「グツ!?!」

サイドンの顔めがけて、小さな水の塊がぶつけられた。

ハツとして飛んで来た方を見れば、そこに居たのはサトシと遊んだニョロモで、力強く鳴いて跳ねている。サトシたちは固まる体に喝を入れ、足をもつれさせながらもサイドンの傍から逃げ出すことができた。

サイドンはじめん／いわタイプのポケモンだ。この悪天候に加え

て、ニヨロモの「水鉄砲」は効果抜群である。

これで助かった、そう思いたかった——だが、サイドンはギツと彼らを睨み付け、右腕を大きく振り上げる。

「『メガトンパンチ』だー!」

シゲルがサイドンの繰り出す技を言い当てるが、それが何だと言うのか。

ポケモントレーナーでない彼らにはサイドンの攻撃を防ぐ術はなく、またニヨロモでは敵わない。

今度こそダメだ。そう諦め、強く目を瞑った——その時だった。

「ハアッ!」

ガキンツと何かが強くぶつかり合う音が響き渡った。

「……え?」

「……あ、」

何が起きたのか。恐る恐る瞼を持ち上げたその先に映ったのは「赤」。

小さいけれど大きな、細いけれど力強い、そんな背中が、自分たちとサイドンの間に割り込んでいた。

「もう大丈夫だ、二人共」

「『エミヤ!!』」

「『ビー!』」

そこに居たのはエミヤだった。そしてエミヤの肩口からひよつこり顔を覗かせ、セレビーが今度は元気よく挨拶する。

エミヤは手にしていた物を破棄し、サトシとシゲルとニヨロモを抱えて飛び退く。サイドンは突然現れた人間を警戒し、追撃してくることはなかった。

「すまない、助けに来るのが遅くなったな」

サイドンから十分な距離をとり、そこで少年たちを下ろしたエミヤは、それぞれの濡れた頭を撫でてやる。

とうに限界を迎えていたのだろう。二人はそれで涙腺を決壊させ、大粒の涙を流し始めた。

「さて、少々大人しくしてもらおうか」

「グオオ……」

エミヤが構え直せば、サイドンは警戒を強めた。

サイドンはこの目の前に居る人間が、これまで出会って来た何者よりも強いこと感じ取っていた。

「――投影、再開」

エミヤの魔力回路が起動し、両の掌に幻想を形作る。

先まで何もなかったそこには、雌雄一对の二剣が握られていた。黒い干将を左に、白い莫耶を右に構え、サイドンを真っ直ぐ見つめる。

「セレビイ、離れていろ」

こくん、と一つ頷き、セレビイはエミヤの傍を離れてサトシたちのもとへ飛んで行く。

それを目尻に確認し、エミヤは動いた。

「――!?」

サイドンの目が見開かれる。

一瞬の間に、エミヤは眼前にまで迫って来ていたのだ。

驚き固まるサイドンから目を反らさず、エミヤは雨を吸って変色した外套を翻し、構えた莫耶を振り抜こうとする。

しかし、反応はサイドンの方が早かった。

「なにっ!？」

今度驚きに目を見開かせたのはエミヤだった。

振り抜かれた莫耶が折れたのだ。

確かに弱体化しており、完璧な投影ではなかった。再現度の甘さから中身はスカスカであっただろう。しかし強化を重ねがけることで十分武器としての役割を成せる出来にまで補完できていたはずだ。

だが、実際はサイドンに触れた途端に碎けてしまった。

残った柄の部分も四散させ、改めて莫耶を投影し直す。

これは魔術の無効ではない。ならば、単純に莫耶の強度がサイドンに劣ったと言うことだ。

実際、サイドンはあの一瞬で“まもる”を行い、瞬間的防御状態に移っていた。“まもる”は技の発動が極めて早いものであり、どんなに強力な攻撃でも防いで見せる防御技最高位の能力である。

また、その判断をトレーナーもなく自分のみで行ったことから、このサイドンのレベルが非常に高いことが窺えた。

(知識不足が仇となっているな……)

予想外にポケモンの能力値が高いこと、そしてそれを見抜けなかった自分に心の中で悪態を吐く。

強化を二度、投影を三度。たったこれだけの魔術しか使っていないにも関わらず、現在のエミヤは魔力不足に成りかけている。

元より、セレビイの時渡りによる負荷のかかった霊基の回復に魔力を大量に消費しており、またアラヤからの魔力供給がないため、自前で補わなくてはならない。だが、エミヤは元々魔術師としては三流であり、魔力量は多い方ではないため、あと一度でも投影を行えば、意識を手放す恐れがある手前まで来ていた。

故に、サトシとシゲルを確実に助けるためには、この投影のみでサイドンを殺すしかない。

「……………」

エミヤは迷っていた。今までならば、殺すと決めればその手段を即座に実行に移して来た。しかし、今は答えを得たことにより、原点に諭されたことにより、ただそれを排除するだけが救いではないことを思い出していた。

ここでこのサイドンを殺すことが、果たして本当に『救い』なのか——否、それだけが『救い』なはずがない。

そして何よりも、子どもたちの前で命の終わりを、終わらせる瞬間を見せたくはなかった。

雨によって額に張り付いた前髪を掻き上げ、必死に思考を切り替える。

一つ、エミヤには奇妙に感じるがあった。

サトシとシゲルを追い詰めたサイドンだが、サイドンも彼らと同じように泥だらけになっているのだ。

サイドンはじめんタイプでもあるため、決しておかしなことではないのだが、頭の中から尻尾の先まで至る所が汚れており、雨によって流れ落ちない不自然に細かい傷が多々見られた。また雨などにより、



疲労も濃いのだろう。肩で大きく息をするその様は、何処か自然界の生き物として不自然に映る。

「……まさか」

ある可能性に気づき、奥歯を噛み締めた。

ならば、ただ倒すのは論外だ。動きを止めなくてはならぬ。だが、エミヤにはその術を取れる手立てがない。

「セレビィ！ こいつを一瞬止めることはできるか！」

「ビ、ルリ！」

エミヤが背を向けたまま問いかけたそれに、セレビィは頷いて答えた。

そして直ぐ様セレビィの瞳に光が宿り、その体の周りに幾つかの歪みが生まれる。数えれば五つの歪みは塊となり、茶色の小さな種に姿を変えると、セレビィの掛け声と共にサイドンへ向かって一斉に襲いかかった。

サイドンは躲そうとするが、疲労が濃いよう動きが鈍い。そのまま五つの種の内二つを腕と肩に食らい、種は肉体に小さな根を張り、芽を生み出した。そして残りはその足元に落ちたが、それだけでは終わらない。

「ビィー……!!」

よりセレビィの輝きが増した時、地面から立派な根が生えてきたのだ。

根はまるで生きているかのように動きまわり、逃れようとするサイドンに絡み付くと、その動きを封じて見せた。

「すげえ……」

「『宿り木の種』と『サイコキネシス』だ……」

サトシとシゲルは、その光景に見惚れた。

あれだけ恐ろしかったサイドンが、セレビィのような小さなポケモンによってあっさり捕らえられてしまったのだ。サイドンは必死に暴れて逃れようとするが、絡み付く根はびくともしない。サイドンに力負けないレベルの技に、彼らも圧倒されていた。

「ハアッ！」

「ッ!?!」

エミヤは動けないサイドンの懐に潜り込むと、その鳩尾を柄で殴打した。

固く厚い皮の感触が反動として返ってくるが、それ以上の衝撃がサイドンを襲う。

声を上げることもできず、体をくの字に曲げたサイドンは、そのままくったりと力なく根にもたれかかる。気を失ったようだ。

エミヤは沈み込んだ柄を引き、陥没した鳩尾を確認する。それから握る物の確認をし、大きく息を吐き出した。

柄に亀裂が入っていたのだ。

サイドンはエミヤの攻撃を防ごうと“まもる”を行ったのだろう。だが、“まもる”は重ねる毎にその精度が落ちていく技でもある。結局防ぎ切れることはできなかったが、またもや武器の破壊を成功させていた。

「ビィ~~~~!!」

「うわあ!?!」

さて、後はどうやってこのサイドンを運ぼうか、と残り魔力と相談していたエミヤの顔に、物凄い速さでセレビィが抱き付いてきた。思わず悲鳴を上げたエミヤは、疲労もピーク近いのもあり、そのまま地面に倒れこんだ。今更であるが、せつかくシャワーを浴びた体は泥だらけになり、艶のない白髪を斑な茶髪へと変えさせてしまう。

だが、セレビィはそんなこと知ったこっちゃないとばかりに頭をぎゅうぎゅうと抱き込み、放さないとはかりに唸っている。

一体どうしたらいいのやら。困惑するエミヤの元に、サトシとシゲル、それからニヨロモが駆け寄って来た。

「エミヤ! 大丈夫か!?!」

「凄かった! エミヤスッゲーかつこよかったぜ!」

「ニヨロ、ニヨロ!」

「あ、ああ……」

二者一体のそれぞれの声に、とりあえず一言返しておく。ちゃんと返事をしてやりたいのは山々だが、何せセレビィが眼前に張り付いて

淡い赤しか見えない。

セレビイを剥ぎ取ろうとしてもびくともせず、エミヤは仕方なく、とりあえず上体だけでも起こした。

それから直ぐにフシギバナを連れたオーキドが現れ、サイドンを連れて彼らは研究所へと戻って行った。

サトシとシゲルがハナコとオーキドにこつてり叱られた翌日。

子どもたち二人は朝からハナコに連れられて病院へ出かけたため、オーキド邸にはその家主と婦警のジュンサーが難しい顔で話し込んでいた。

「トレーナーの話によれば、特徴が例の組織と似ているようでした」

「……やはり、か。最近活動が活発化しているようだが……」

「ええ。我々も警備を強めています……」

(……さっぱりわからん)

さて、オーキドとジュンサーが話し込んでいる部屋の扉の外。その前にティーセットを持って立つエミヤは、中の様子を盗み聞きしているのだが、まったくもってわからなかった。

初めこそ身元の証明のない身であるため、警察だと言うジュンサーを警戒し、探りのつもりで聞いていたのだが、どうにも雲行きの怪しい話をしている以外に得られる情報はない。

(私のことは本当に話さないのだな……)

疑っていたわけではないが、何となく湧いた疑念に嫌気がさす。

いつから他人を信用できなくなってしまったのか。

重いため息を吐けど、苦い感情はなくならなかった。

「では、私はこれで」

落ち込んでいると、入室のタイミングを逃してしまった。

ティーセットを持ったまま外で突っ立って居たエミヤとぼったり遭遇したジュンサーは、ぱちくりと瞬きした後、くすりと微笑みを浮かべる。

「君がエミヤくんね」

「え、あ、はい」

「お手柄だったわね。ありがとう」

ポンポン。ジュンサーの白くて細い手がエミヤの頭を撫でる。  
思わず、エミヤは固まってしまった。

「では、博士。また何かありましたら」

「うむ、こちらも何かわかったら知らせよう」

オーキドはジュンサーを見送るため玄関まで付いて行き、エミヤは一人、応接間の前に残される。

「……………頭撫でられるのなんて何時振りだろう……………」

「ルビビィ〜」

エミヤの呟きに応えてか、外套の下に隠れていたセレビィは、ひよっこり出て来て楽しそうに白い頭を撫で回した。

「君の言った通り、あのサイドンは盗難されたポケモンじゃったよ」

戻って来たオーキドの言葉に、お茶の準備をしていたエミヤは、やはり、と苦い顔で頷いた。

「トレーナーがニビシティで盗難届を出して居った。遅くとも三日以内には持ち主の元に戻ることができるじやろう」

「そうか、よかった」

ソファアに座ったオーキドの前に紅茶を置き、その正面にエミヤも腰かける。膝にはセレビィがちよこんと乗り、朝に焼かれたクツキを手に持った。

「だが、よくわかったの。あのサイドンが盗まれたポケモンだと」

「似たような状態の動物を見たことがあったのと、野生にしては不自然な傷と反応速度だったからな。特に傷の方だが、普通全身に傷などできんだらう」

全身隈なく負傷するには、全方位からの攻撃か、よつぽどの勢いで転ぶくらいだろう。あの強靱な体がちよつとやちよつとのこととで傷付くとは思えないため、となれば、それができるサイドン以上の強さを持つ存在に追い詰められた可能性がある。

きっと、あのサイドンはサトシたちと出会う前に何処かから逃げ出し、追っ手によって傷を負っていたのだろう。そのため周囲への警戒心が強く、子どもであっても容赦なく彼らに襲いかかったと考えられる。

「……何処の世界にも、悪党は居るんだな……」

「残念ながら、私欲がある限りなくならん業じやろう。うむ、うまい」  
紅茶に口を付け、オーキドは頬を緩める。その表情を見て眉間の皺を緩めたエミヤもカップに口を付けた。

「ああ、そうじゃ。君にあげようと思っておった物があるんじゃない？」  
「物？」

首を傾げるエミヤに、オーキドはポケットから小さなボールを取り出した。

大きさは親指と人差し指で作った丸程度で、上下が赤と白に別れた間に一つの白いボタンが付いている。

オーキドがそのボタンを押すと、ボールは掌サイズまで膨らみ、それを見たエミヤは思わず感嘆の声を溢し、セレビイはキラリと大きな目を輝かせた。

「これは『モンスターボール』と言ってな、ポケモンが小さくなる特性から作り出された、まあ、ポケモンの入れ物の様なものじゃな。首輪の役割もあり、一度ボールに入って登録されたポケモンは、他のボールに入れることができなくなる仕組みになっておる」

「なるほど、これに入れてトレーナーはポケモンを連れ歩いているのか」

「うむ。故に『ポケットモンスター』と呼ばれるんじゃないよ」

構造が気になるのだろう。エミヤは手に取ったモンスターボールを様々な角度から不思議そうに眺める。

ボタン一つで歪みもなく円形のまま伸縮する機械。一種の芸術と言えるだろう技術だ。

「これでエミヤもポケモンを捕まえてみてはどうだ？」

「……いや、せっかくだが遠慮しておこう」

確かにこの世界のポケモンと言う存在は、見たこともない不思議な生き物で、エミヤの目からも魅力的に映る。

しかし、やはりエミヤは死者だ。無闇にこの世界の生きるものと関わり、また死者がその生を縛るべきではないだろう。ポケモンを捕まえると言うことは、ポケモンを飼うと言うこと。すなわち、ポケモン

の生き方を決めるのだ。死者がやってはならない行いだろう。

(それに、私なんかと居てもつまらないだろうさ)

「……そうか。じゃが、気が向けばいつでも言ってくれ」

「有り難いが、気が向くことはないだろうな」

「ルビ☆」

エミヤがオーキドにモンスターボールを返そうとした時、セレビィがそのボタンを押して可愛らしい声を上げた。

パツカリとボールは口を開き、赤い光線に呑まれたセレビィが飛び込んで行く。ボールはセレビィを中に収めると、その口を閉じてテールへと落ちて行った。

くるりくるりとボールは二三度揺れ、直ぐに治まると、鍵のかかったような音を最後に静かになる。

「……………」

「……………」

エミヤもオーキドも静かになる。

静かにならざるを得なくなる。

「……………博士、これは……………」

「うむ、初めてのゲット、じゃな」

「ビィ〜〜♪」

ポンツと自力で飛び出して来たセレビィが、空中で一回転して元の位置に着地する。つまり、エミヤの膝に舞い戻って来た。

「……………なんでさ……………」

エミヤとセレビィの冒険は、まだまだ続くらしい。

## 無印

### 1話 キミのはじまり

広大でのどかな自然に目が行きがちだが、マサラタウンは海に面しているため、実は小さいながらも港が存在する。

近年ではめつきりポケモン以外の魚が取れず、以前までの漁業がやりづらくなって停船しているものもあまり見なくなっただが、港であることに違いはない。

「ここまで乗せてもらってすまん」

「なーに、旦那の頼みならお安い御用だよ」

そんな寂れた港に降りた赤い外套の少年——エミヤは、モーターボートの運転手に軽く頭を下げる。男は水泳ゴーグル越しでもわかる笑みを浮かべてサムズアップすると、そのまま港から離れ始めた。

「また何か情報が入ればお知らせするぜー!」

「有益な物であることを期待しておこう」

エミヤはボートが小さくなるまで見送り、それからくると後ろを振り返る。見えるのは田畑と木々、それからぼつりぼつりとある家くらしいかない。

正真正銘の田舎町。その空気を命一杯吸い込み、満足げな表情を浮かべた。

「……久し振りだな」

キミのはじまり

エミヤがこの世界の帰郷拠点としているオーキド研究所までの道を歩いていると、その玄関先が人ばかりで随分と賑やかになっているのを見付けた。

はて、今日は一体何があったのやら。

平和で何も無いが故に、事件の原因となりやすい研究所の過去を思

い出しながら近付けば、人だかりの真ん中にて見知った少年たちが仲良さげに話しているのに気が付いた。そして片方の少年の手にはモンスターボールが握られて居り、それを見て今日が新人トレーナーの旅立ち日であることに思い至る。

「そうか、二人共もう十歳になるのか」

「エミヤ！」

思わず感心すると、気付いた少年たち——シゲルと何故か寝間着のままであるサトシが一緒になって振り返り、喜色の表情を浮かべる。

「帰ってたのか！」

「おかえり！ エミヤ！」

「ただいま、二人共」

するりと出て来た「ただいま」に、自分のことながら苦笑いが溢れる。この世界で暮らして三年程となるが、随分と馴染んだものだ。

感傷に浸りながら、ウエストポーチに付けられた六つのボールに触れたエミヤは、短い間で変わった自分に僅かな戸惑いを覚えた。

「ところで、今日から旅立つのか？」

「そうさ！ 出遅れ真っ最中のサアトシくんとは違って、優秀な僕はこれから一歩先にポケモンマスターになってくるよ！」

「の割には、もう昼近いが……いや、何でもない」

太陽を見上げ、ほぼ真上にある光に目を細める。

シゲルのことだ。サトシを揶揄うためにわざわざ遅刻して来た幼馴染みを待っていたのだろう。用意周到と言うか、律儀と言うか。

オーキドが実の孫よりもサトシを構うせいで、どうにもシゲルは幼馴染への当たりが強い。エミヤからすれば、そこからは嫉妬心が丸見えなのだが、生憎と周囲は気付いていないらしい。

その要因は、オーキドが決してシゲルを疎かにしていないからだ  
が、それがまた関係を拗らせている。

(まあ、オーキドに非がないとは言い切れないのだが……)

気付いているならば、関係の修復をしてやればいいものの、エミヤはこれを本人たちが解決すべき問題として捉えていた。

家族関係や友人関係の解決は、時に他人の力も要るが、基本的には



身内で済ませるべきものだ。部外者が無闇にしやしやり出るものではない。

と、指摘しかけた言葉を飲み込んだエミヤは、ムツとした顔をするシゲルへ話題を変えて問いかけた。

「もうポケモンを貰ったようだな」

「まくねく。ボクはポケモン研究者・オーキド博士の孫だからね。お爺様の名にかけて、それなりのポケモンは貰ったぜ」

「いいぞいいぞシ・ゲ・ル♪ がんばれがんばれシ・ゲ・ル♪」

シゲルの後ろに居るチアガールたちが、笑顔でポンポンを振りながら声援を送る。マサラタウンのチアガールと言えば、それはオーキドの兄が持つ選挙応援団のメンバーだろう。わざわざ借りて来たのか、それとも元々仲が良かったため、駆け付けてくれたのか。

「ありがとう友よ！ ガールフレンドよ！ 私はきつとポケモンマスターになって、この町・マサラタウンの名前を世界中に広めてみせる！ 見送りの皆さま御苦労様です！ オーキドシゲル、ただ今よりポケモントレーナーの修業に行つて参ります!!」

仰々しく宣言し、シゲルはチアガールたちと一緒にオープンカーに乗って走り去って行く。車での旅は確かに便利だが、メンテナンス代やら交通路が関わってくるため、その選択は人に寄りけりだ。その点で考えればオープンカーは選択外とも言えるが、何だかんだでちゃんとしているシゲルならどうにかするだろう。

住民たちと共にハーレムで旅立ったシゲルを見送り、エミヤは昔のシゲルを思い出していた。

（おかしい、サトシへの嫌味癖はともかくとしても、あそこまでキザではなかったはずだ……何処で教育を間違った？）

通算すると半年間程しか一緒に過ごしていないため、そこまで育児に関わったとは言えないが、エミヤの中ではシゲルもサトシも完全に自分の弟感覚になっていた。まあ、本人たちもそれを否定しないため、間違った認識ではなかったりするが。

「ん？ サトシくんじゃないか。それにエミヤも。戻つておつたのか」

「ああ、たった今な」

「オーキド博士！ オレのポケモンは!？」

「坊やのポケモン?」

わざとらしく登場し、わざとらしくサトシの言葉に首を傾げるオーキド。

最後の新人トレーナーがなかなか姿を見せに來ないため、様子を見に出て來たのだろう。

「オレのポケモン!」

「そういや、今日の予定は四人と聞いていたが……だが坊や、パジャマで修行に行くのか?」

「パジャマは邪魔! ボヤボヤして遅刻したけど坊やじゃありません。オレ十歳の少年です! とにかく! オレにもポケモンを!」

エミヤは二人のやり取りを眺め、一人頷いて確信を抱いた。シゲルは間違いなくオーキドの孫である、と。

なんて思いながら、オーキド研究所内へと移動しつつ面白いやり取りをする友人二人に、エミヤはこっそりと笑った。

「オレずつと迷ってたけど、もう決めました。ゼニガメ! オレのポケモンは君に決めた! ……あれ?」

如何にも、な雰囲気ですぐ三つのモンスターボール。その一つの口を開くサトシだったが、中には何も入っていない。遅刻しなかった他のトレーナーが既に選んだようだ。

ならばフシギダネを! と別のボールを開けるも、そちらも時間通りに來たトレーナーが既に持って行った後で、最後のヒトカゲも同じような結果であり、呆れた顔をするオーキドの前でサトシは肩を落とした。

「通勤電車もポケモンも一秒の遅れが人生を変える」

「じゃあ、オレはポケモンなしで出かけるんですか?」

「博士、貴方までサトシを虐めてやるな」

暗に、他のポケモンを用意してあるのだろうか? とエミヤが問えば、オーキドがムツとした顔を、サトシがぱっと花咲く笑顔を浮かべる。

オーキドには彼なりのシナリオがあるのだろうが、サトシもエミヤにとつては可愛い弟分だ。久々に会ったのに、あまり落ち込んだ顔ばかりは見たくはない。

そもそも、新人トレーナーが四人居る時点で、予め四体のポケモンを用意するのが当たり前だ。カントーではほのおタイプのヒトカゲ、くさタイプのフシギダネ、みずタイプのゼニガメが贈られるのが通例であり、多くのトレーナーを見送って来たオーキドがそんなミスをするとは思えない。

「うむ、たしかに……もう1匹居るには居るんじゃないが……」

「それを下さい！」

「この残りポケモンには、ちと問題があつてな」

「オレが遅刻したことにも問題があります！」

悔しそうなオーキドと勝ち誇った笑みを浮かべるエミヤを脇に、サトシがずっとオーキドへ近寄る。

反省も後悔もするが、くよくよしないのがサトシのいい所だろう。

「ならばっ！」

オーキドは元々置かれていたモンスターボールたちとは別の場所から、新しいボールを取り出す。稲妻のマークの付いたそれは、一目ででんきタイプのポケモンが入っていることを知らせていた。

「ピカチュウ」

「可愛い！ 最高じゃないですか！」

愛らしく鳴いて出て来たのは、電気ネズミポケモンのピカチュウだった。

この辺りではトキワの森に生息する小型ポケモンであり、全身を黄色い毛で覆い、ウサギのようなピンと伸びた耳、それからギザギザの尻尾と両頬にある赤い電気袋が特徴的だ。これでもネズミである。

ビジュアル的には、他の三体とあまり変わりのない可愛いらしいポケモンだ。

だが……、

「そかな？」

「おい、オーキド……ピカチュウは……」

「そうですよ！ ピカチュウ、よろしく！」

「ピカ！」

「ぬわわっ!?!」

突然、眩い光が目の前を染め上げる。

ピカチュウが抱き上げたサトシに対し、放電したのだ。その様子を見ていたエミヤは、あちやーと額を抑える。

ピカチュウは愛らしい見た目でトレーナーたちを魅了するが、実はとっても恥ずかしがり屋で人馴れしにくいポケモンだったりする。

つまり、新人トレーナー向きではないポケモンなのだ。

慌ただしく旅立って行ったサトシを見送り、改めて住民たちと久方振りの挨拶をした後、エミヤは研究室へと戻って勝手知ったる棚からティーセットを取り出た。そして沸いたお湯でカップとポットを温め、土産として持ち寄った茶葉と砂時計、それから立ち寄ったクチバシティで買ったワツフルと有り合わせで作ったサンドイッチを持って研究室へ向かった。

「エミヤの茶も久々じゃな」

「前に戻ったのはカロスへ行く前だったか」

既にソファアールで待機していたオーキドの前にワツフルとサンドイッチを置き、その向かい側にエミヤも腰を下ろす。そして逆さにされて砂を落とす時計をテーブルに置くと、ウエストポーチからUSBメモリを取り出した。

オーキドはさっそくとサンドイッチに伸ばした手を止め、代わりにそのメモリを受け取る。

人差し指程度の大きさであるそれは、黒地に赤いコイキングのシルエットが浮かぶデザインとなっており、エミヤのお手製であったりする。世界に一つだけのメモリだ。

「カロスで暗躍しているフレア団とか言う輩のメンバーリストだ。一部だが、裏も取れている。まあ、ボランテアアでできる範囲なんてたかが知れているが、あとは貴方から根回ししておいてくれ」

「……まったく、これをボランテアアと言う君が未恐ろしいな」

オーキドの言葉に肩を竦める。

世界を見て廻ることを目的に宛もなく旅をしていたエミヤだが、お人好しな彼が各地で起こる事件を黙って見ているわけもなく……下調べ程度ではあるが、オーキドを通して情報提供をしていた。

エミヤは別にこの世界の悪党たちを全て倒そうだとか、捕まえようだとかは考えていない。それはこの世界の人たちがやることであり、異邦人であるエミヤがやるべきことでも、やっていいのでもないだろう。提供した情報を信じるか信じないか、信じたならばその上でどう行動していくのか、後のことは彼らに任せるべきことだ。

と、ついこの間ボッコボコにしてきたことを忘れ去り、六つのモンスターボールもオーキドへ渡す。

一つ以外、旅立つ際には不要とした五つのボールには、それぞれ全てに住民ができていた。それを認めて嬉しそうに頬を緩めるオーキドとは対照的に、エミヤはやや気まずげに落ち切る砂を見る。

「……捕まえたわけではない……」

「素敵な出会いがあったようじゃな」

「……………」

無言でポットをかき混ぜ、カップへと紅茶を注ぐエミヤは答ええない。オーキドはそれでも構わなかった。

この友人がモンスターボールを使った。そこから導かれる結果が大事なのだ。

「さて、帰って来て早々じゃが、今後はどうするつもりじゃ？ 流石の君も長旅で疲れたじやろう？」

「ああ……と答えたいが、残念だがプラターヌ博士から頼まれ事がある。明日にでもナナカマド博士の元へ届け物をしに出る予定だ」

「ああ、噂のアレか？」

「らしいな。まったく、私はデリバードではないのだが……」

運搬業者のようなことをするグローバルなデザインをしたポケモンを思い出し、エミヤは重いため息を吐く。それだけ周囲からの信頼が厚い証拠なのだが、本人ばかりがそれを知らないようで、己の幸運の低さを嘆く友人を眺めたオーキドは、受け取ったポケモンたちを回復装置にかけようとした——ところで、気が付いた。

「あ、」

「ん？」

装置の前で不自然に固まったオーキド。

エミヤからはその顔色を窺うことはできないか、小刻みに震える体がただ事でないことを伝えてくる。

どうしたのかとエミヤは首を傾げ、ゆつくりとこちらへ振り返った友人の顔を仰ぎ見た。

「……トレーナーカードを、渡し忘れておった……」

「……………」応訊こう。誰にだ？」

「サトシに、じゃ」

「……………」そうか……………」

「……………」

オーキドの「むごんのうったえ」▼

「ぐっ」

エミヤは「たえる」をつかった！▼

「……すまん、届けてくれんか？」

オーキドの「ストレートないらい」▼

「……………」了解した……………」

効果は抜群だ！▼

エミヤは、サトシのトレーナーカードを手に入れた！▼

「流石はワシの友人じゃ！」

「……………」はぁ……………」

肩を落とすエミヤを心配してか、装置に置かれたモンスターボールの幾つかが揺れる。

デリバードの看板を放棄して早々、自分で拾いに行くお人好しなエミヤであった。

## 2話―a ラブリーでチャミー

ダート自転車。軽いながらも丈夫に出来ているのが特徴的な自転車であり、マツハ自転車より速度が出ない点を除けば、小回りの利く多目的な用途で使える、やや上級者向きの自転車である。マツハ自転車と共にハウエン地方発祥の物であり、エミヤも愛用する道具の一つだ。

と言っても、エミヤが使ってるのは、キンセツシティにあるショツプで物色した物の投影品であるため、本物ではない上にやや性能が落ちている。しかし、工程を丁寧に行えば、その差異もほぼないと言える出来にまで仕上げられるため、性能の差は微々たるものと言えるだろう。

その赤フレームが眩しいバツタモンダート自転車に跨がったエミヤは、さてと、と二つのモンスターボールを投げる。

綺麗な放物線を描いたボールから飛び出して来たのは、山羊のように後ろへ反り返る角を持つ逞しい足腰の黒い犬――ダークポケモン・ヘルガーと、時を渡る淡い赤色の妖精――セレビィだった。

「ヘルガー、サトシを探してくれ。ピカチュウを連れているから見付けやすいはずだ。セレビィはヘルガーに付いて行って、道案内を頼む」

「ガウー！」

「ビィー！」

サトシの持ち物の臭いを嗅がせたヘルガーへ、エミヤは指示を出す。そしてその背に跨がったセレビィへもフォローを頼むと、二体は揃って頷き、一番道路へと駆けて行った。力強い脚力は一気に加速させ、二体の姿を小さくする。

あつと言う間に走り去って行ったその姿を見送ったサトシの母・ハナコは、感心してエミヤに拍手を贈った。

「強そうなポケモンね。あの子もエミヤくんのポケモンなのね。トレーナーに似て賢い子だね」

「ありがとうございます。あいつに伝えておきます」

「ええ、是非そうしてちょうだい。あ、これ。良かったら持って行って」

ハナコはサトシを見送る際にエミヤと再会した後、すぐに帰宅し、おにぎりを作っていた。女の勤なのか、彼がすぐに旅立つことを予想していたのだろうか。

計四つの正三角形をアルミホイルに包んだ簡単な弁当を手渡し、ハナコは腰に手を当てて嘆息した。

「エミヤくんったら、いつも帰って来たと思ったらすぐまた旅立ちちゃって。若い者には旅をさせろ、とは言うけど、もうちよつと落ちていたらいいと思うわ。まあ、今回はうちの子が原因なんだけど」

「どちらかと言えば博士が渡し忘れたのが元ですが……では、次に戻った時には、家にお邪魔しても構いませんか？ また一緒にランチでも」

「ええ、是非いらして頂戴。楽しみにしてるわ！ あ、おにぎりの具はエミヤくんの好きな具にしといたから」

「ありがとうございます。食べるのが楽しみだ」  
受け取った弁当をポーチに入れ、ペダルに足をかける。

トキワシテイの方角で、空色が怪しくなってきた。今出れば確実に雨に降られて濡れるだろうが、サトシも初日に雨の中を進もうなどと無茶はしないと考えられる。確実に追い付けるだろう。

「まだサトシからは連絡は入っておらん。普通に歩く分なら日を跨ぐだろうが……」

「どちらにしる、今日中にトキワシテイを越えることはないだろう。問題ない。十分カードを渡せる範囲内だ」

新人トレーナーであれば、町に着けば連絡を入れるだろう、とメールを確認してきたオーキドは、ゆっくりと首を左右に振る。まだ旅立って数時間。流石にトキワシテイには遠い。

「では、行ってくる」

エミヤもヘルガーとセレビイの向かった一番道路に向けて走り出した。



ラブリーでチャミー

「雷か。結構派手に落ちたが、何ともないか？」

「バウー！」

「ビー！」

「そうか、だがあまり無茶はするな」

先行したセレビイたちを追って自転車を走らせていたエミヤを、案の定雨が濡らした。さらに悪天候は重なり、ゴロゴロと重い唸りを上げ始めたかと思えば、一つ大きいものが前方で落ちた。これでは、新人トレーナーの旅立ち日には最悪と言えるだろう空模様だ。

車で旅立ったシゲルは既に町に入って大丈夫そうだが、徒歩のサトシは心配だ。

道の真ん中でエミヤを待っていたヘルガーとセレビイを一撫でし、エミヤは空を見上げる。

幸い、先までの荒れようが嘘のように、雨足は途絶えてきている。ぽつりぽつりとまだ降っているが、雲の切れ端から光が落ちてきているため、もう雨も止み、この様子なら晴れるだろう。

甘えるようにその首もとにすり寄ってくるヘルガーの耳の裏を掻いてやり、エミヤはぐるりと周囲を見回す。

ここまで随分と進んで来たが、サトシの姿は見えていない。それに妙に森は静かで引つ掛かりを覚える。

はて、この一番道路はこうも静かであっただろうか？

悪天候で生き物一匹見られないが、それは雨が降り出す前からだったように思える。

「……いや、オニスズメを見かけないのか」

この辺り一帯を縄張りとする、名前負けしない小型の鳥ポケモン・オニスズメは、エミヤの記憶が正しければ、いつも忙しく飛び回っていた覚えがある。だが、今はその影が欠片も見られない。

「たしか群れで行動していたは、ず………？」

何かあったのだろうか？

天候に続いて何か不吉な予感を感じるエミヤだったが、進行方向か

ら何やら悲鳴が聞こえてきて顔を上げた。

見れば、光を差し出した雲の下を、細かい黒豆たちが固まって動いており、それはそのままエミヤの頭上を通り過ぎてマサラタウンの方へと向かって行った。

「……オニスズメ?」

黒豆の群れは、件のオニスズメであったが、はてさて、一体全体この先には何があるのやら。

先の雷に驚いたのか、それとも別の何かか。群れで行動していた以上は、何かしらの一大事と対面していたと思われるが、それを正確に推測するのは難しいだろう。

首を傾げるだけ傾げ、結局何も思い付かなかったエミヤは、とりあえずトキワシテイまで行ってみよう、とヘルガーに先行するように指示を出しかけ、そこで動きを止めた。

「……あれは……」

言うならば、黄金色に輝く虹色の鳥。

自分でも何を言っているかわからないが、エミヤにはそうとしか表現できなかった。

カントー地方では見たこともない程に大型であり、広い翼を悠々と羽ばたかせ、光を散らしながら飛んでいる。

元の世界の生き物に当て嵌めるなら「鳳凰」と言ったところか。

神秘的であり、どこまでも美しいその鳥は、エミヤたちへ目をくれることもなく優雅に、そして偉大さを持って飛んで行く。

「……………まさか……………」

ジョウト地方のエンジュシテイには、ある言い伝えがある。スズの塔に降り立つと言われるある伝説のポケモン。そのポケモンは生き絶えた命を甦らせ、姿を見た者は永遠の幸せを約束されるとも語られている。

前者は、嘗てあったカネの塔が焼け落ちた際に三体のポケモンが死んでしまい、それを甦らせ『ライコウ』『スイクン』『エンテイ』を生んだ伝説から。そして後者は、その目撃情報の少なさからくる幸運から語られるようになったのだろう。前者はともかく、後者に関しての

諸説の根拠は不明であるが、実際に見ればその神秘さに圧倒され、納得せざるを得まい。

「……ホウオウ……」

エミヤは小さく、しかし噛み締めるようにそのポケモンの名を呟き、見えなくなるまで見送った。

ホウオウにはまた一つ言い伝えがあり、心正しき者の前に姿を現す、と言ったものがある。

ただの幸運により目にできたのか、それとも意図的に出会ったのか。その判断はできなかつたが、何故だがエミヤは泣きたい気持ちになつた。

悲しいのか、嬉しいのか、自分でもわからない。それでも、自分の中にある何かを肯定されたような気がする。

この気持ちは、一体なんという名前だつたのか。思い出せないのが少し惜しい。

滲んでしまった視界を拭い、エミヤはいつまでも同じようにホウオウの飛び去つた空を見上げるポケモンたちに声をかける。

「雨も上がったことだし、早くサトシを追いかけよう」

青空が覗き始めた空には、美しい虹がかかつていた。

「絶く対につ許さないんだからくっつ!!」

「……………」

さて、時は少し進み、トキワシティの入り口。

ヘルガーとセレビィをモンスターボールに戻したエミヤの自転車には、一人の同乗者が増えていた。

明るいオレンジの髪を左サイドアップにし、青い瞳を持つその少女は、名をカスミと言う。ハナダシティにあるみずタイプ専門の公式ジム・ハナダジムのジムリーダーの一人だ。

そのカスミが何故ハナダシティの外に居るのか、その理由は知らないが、エミヤはカスミと彼女の自転車を後ろに乗せ、一番道路の途中からここまで走って来た理由なら、十分に把握していた。

「ちよつとエミヤ! あいつの知り合いなんですよ?! どういう教育したら借りた自転車丸焦げにして放置するようなことになるのよっ

!？」

「……すまない、少々世間知らずでな……」

カスミの怒りもごもつともであるため、頭痛のするエミヤは強く言い返せない。

エミヤがカスミと出会ったのは、一番道路ももう抜ける所であった。まさかここまで一度もサトシと出会えないとは、と知っていた以上、身体能力を上げてきた弟分に戦慄していると、道の真ん中で立ち尽くす少女と出会ったのだ。それがカスミである。

お人好しなエミヤはそこで人見知りなセレビイをボールへ戻し、当然のように声をかけた。「どうかしたんですか？」と。

その声によって振り返ったカスミは、まさに般若のそれであった。怒りで顔を赤く染め、眉間にはざつくりと皺が寄り、可愛らしい顔が台無しとなっていた。

そんなカスミにやや引きながらも話を聞いたエミヤは、額を押さえて天を仰いだ。

要約すると、重症のピカチュウを連れた少年に自転車を盗られたと思えば、ここに丸焦げで乗り捨てられていた、と言う。

間違いない。それは十中八九サトシだ。聞いた特徴とも一致しているため、言い逃れもできない。

心配そうにクーンと鳴くヘルガーに慰められながら、安定のエミヤはとりあえずトキワシティまでカスミとその丸焦げ自転車を運ぶことを約束し、それから兄貴分として謝罪して現在に至っている。

カスミの自転車はモンスターハンターも真つ青な炭状態であり、タイヤからフレームの芯までダメになっていた。これではエミヤでもどうすることもできない。買い換えるしかないだろう。

因みに、カスミの自転車が新品であったことも、彼女の怒りに油を注いでいる要因だと思える。

(……交番が無人になっている……何かあったのか？ ん？ あれは新しい手配書か?)

後輪の上に括られた丸焦げ自転車とハブステップを支えにし、運転手の肩に手を置いて怒り冷め止まぬカスミの、その怒号をBGMにし

ているエミヤは、はて、と首を傾げた。

トキワシテイの入り口にある交番には、警察機関の大半を占めるほぼ同じ顔をした一族の一人であるジュンサー（本名不明）が構えているはずだ。しかし通り過ぎる際に見た通りでは、交番は無人であり、道にはタイヤの跡が残っている。近くの車庫のシャッターが開きっぱなしなのを見ると、何か緊急事態があったと考えられた。そして視界の端で捉えた見覚えのない手配書。

僅かな情報から現状を整理しようとしたエミヤだったが、その思考は真後ろから阻まれた。

「あいつはポケモンセンターに居るはずよ！　すぐ向かって！　すぐに!!」

「まあ、こちらが優先か……了解した。振り落とされるなよ！」

「え？　きやあ?」

疑問もあるが、先ずは届け物が先だ。

ペダルを回す勢いを強めれば、それに驚いたカスミが悲鳴を上げた。自然と肩に置く手は拳の形となり、それを感じ取ったエミヤの口角がややつり上がる。

「あのお転婆娘が随分と可愛らしい声を上げるようになったものだ。今なら王子様のために上手に歌えるんじゃないか?」

「あ、あんた覚えて……あの時のことは忘れなさいよ!!」

「まさか。懸命なレディの告白を忘れるなんてするわけがない」

「告白じゃない!!」

「いたたたつ、摘まむな摘まむな」

今度は羞恥心により真っ赤になったカスミは、エミヤの肩の皮を服ごとつねる。それを痛がるエミヤだが、自転車は減速することなく安定した運転捌きによって進んで行く。

実はエミヤとカスミは今日が初対面ではない。

エミヤは二年程前、ハナダジムに挑戦したことがあった。本来はただ世界を見て回る宛のない旅であり、ジムへ挑戦する気などさらさらなかったエミヤだったが、フラストレーションの溜まったセレビイの息抜きに訪れたのだ。

エミヤのセレビイは性格的に臆病なため、あまり人前に出たがらないのだが、しかし元が野生のポケモンである。いつまでもモンスターボールの中でじっとしていることに慣れないセレビイは、外に出て一暴れしてみたい気分となっていた。

しかし困ったことに、やはりセレビイは臆病で人見知りだった。外に出たいが知らない人の前に出たくはない。ならば野生のポケモンとバトルするか、となれど、今度はエミヤがそれを渋った。

当時のエミヤは手持ちを増やす気が全くなかった。そんなトレーナーがただ一方的に野生のポケモンにバトルを仕掛け、終われば放置する。明らかに虐待だ。バトル後にポケモンセンターに連れて行けばいいのかもしれないが、変に懐かれるのも、またポケモン虐待について注意されるのも決まりが悪い。

そうなれば、セレビイが戦える場所は限られることとなり、結果、エミヤたちは比較的人目につかないバトルフィールドがあるポケモンジムにて暴れることにした。

このような経緯により、ハナダジムで出会ったのが、カスミを含めたハナダの四姉妹である。

両親の投げ出したジムを姉妹だけで切り盛りするその施設へ訪れたエミヤは、思った以上に高レベルのセレビイ一体で完勝し、勝者の証であるジムバッジを貰った——とところで、トラブルが起きた。

ハナダジムは副業に水中ショーを行っている。バトルフィールドの大きな水槽がそのステージと兼用されているのだが、セレビイとのバトルの余波により、裏のパイプから水漏れが起きてしまっていたのだ。

ポケモンジムではよくあることなのだが、そんなことを異邦人であるエミヤが知っているわけがなく、責任を感じた彼はその修理と何かお詫びをすることを提示した。

さて、エミヤを知る者ならば有名なことだが、彼は非常に女難の相が強い。どれ程かと問われれば、師匠の従者として付いて行った冬のテムズ川に落とされるくらいに、または本来範囲外であるはずの場所にゴリウーの群れが現れるくらいに、とにかく生前から死後にかけて

女難の相が現れている。

『あら、じゃあお願いしちゃうかしら』

ハナダの美人な方の三姉妹たちは、エミヤの申し出を聞けば直ぐ様両脇を固め、そのまま衣装室へと連行した。

そして次に出てきた時には、何処ぞの王子様のような格好をさせられた一風変わった容姿の少年であり、その片手に台本を掴まされていた。

『この後にショーがあるのよ。王子様役お願いね♪』

『なんでさ!?!』

ショーの詳しい内容は省くが、その時にエミヤは当時八歳のカスミと出会った。

その日はカスミの初めて名のある役を任されたショーであり、さらに一緒に入水するのが初対面の男。

緊張しないわけがなかった。滅茶苦茶緊張していた。

『よろしく頼むよ、お嬢さん』

『ひゃっひゃいつ?!』

それはもう体はかっちなもんだから声はひっくり返り、

『大丈夫かね?』

『だいしゆきれす!!』

盛大に囁んだ。

『~~~~~』

『……大丈夫かね?』

『だいすきです』

『……ありがとう、リトル・プリンセス・マーメイド』

『あううう……っ』

そして言い間違えた。

回想終了。

因みに、その日のエミヤの頬には小さな紅葉が一つ二つあったとか  
なかったとか。

閑話休題。

「そのまま突っ込んでっ!!!」

「無茶苦茶言うな!!」

と言いつつ、カスミの指示によりポケモンセンターへ自転車ごと突っ込んだエミヤは、カウンター前に華麗にスライド停止して見せた。会心の出来である。ちよつとドヤ顔だ。

そして、そんな彼らの目の前にはボロボロの格好でいるサトシが居り、彼はパチクリと目を瞬かせていた。

「エ、エミヤ?… なんでここに?」

「いやはや、驚いたぞ、サトシ。まさか半日でトキワシテイまで辿り着く「見く付くけくたくわくよく!!!」」

エミヤのセリフを押し退けて、カスミがサトシの前に立った。

その顔に覚えのあったサトシは、カスミとエミヤが運んできた丸焦げの自転車に視線を向け、一步後退る。

「な、なに、その自転車……」

「これが自転車って言える!? まるで食べ残しの焼き魚よ!! コゲコゲの骨だけじゃない!!」

「私ならもつと上手く焼くがな」

「エミヤは黙ってて!」

「む、了解した」

「魚だつて化けて出るわよ! 私の自転車、このままじゃ済まさないんだから!!」

正に怒り心頭。

焼き魚どころか炭となった自転車を指さし、カスミはサトシにどうしてくれるのかと問い詰めた。

「弁償でも何でもするから……でも、今はそんな時じゃないんだ……オレのピカチュウが……」

「……なるほど。その格好を見るに、相当な無茶をしたようだな」  
何をしたらそうなるのか。

サトシは全身泥だらけの上に傷だらけだ。あの悪天候の中を駆け抜けて来たことが窺える。

「……そんなに悪いの?」

「……たぶん……オレ、どうしたらいいのか」



カスミも察したのだろう。先までの勢いとは一転し、心配そうにサトシへ問いかければ、弱々しい答えが返って来た。

「……サトシ」

そんな弟分へエミヤが声をかけようとしたその時、ずっと点っていた処置室の灯りが消えた。

サトシは弾かれるようにそちらを向き、現れたジョーイとラッキー、それからベッドに寝かされるピカチュウに駆け寄った。

「ピカチュウ、大丈夫か!？」

「危機は脱したわ。もつとも、ポケモンセンターの医者と看護婦が救えないポケモンは居てはならないけど。ね？」

「さすがポケモンセンター!」

「ありがとう! 先生!」

「後は病室の方で回復を待つだけ。傍に付いててあげなさい」「はい!」

ピカチュウの額にはバイタルサインを示す装置が嵌められ、それは一定した間隔で点滅している。見た目の負傷に目が行くが、ピカチュウの容態は安定しているようだ。

ほっと肩の荷が下りたサトシは、次に申し訳なさそうな顔をしてカスミを見た。

「悪い、こんな場合だから自転車のことはもう少し後で……」

「何言ってるのよ!! そんな場合!？」

「え?!」

「早く看病してあげて! 早くついたら早く!」

「まったく、その通りだ」

他人のポケモンながら、ピカチュウを懸命に心配するカスミに、優しい微笑みを浮かべたエミヤが同意する。サトシはその声と顔を見て、思わず一歩後退さった。

何故ならば、エミヤは全く笑っていないからだ。

表情筋の話ではない。その細められた鋼の瞳と低い声のことである。

それは短い間だったが、エミヤと過ごした半年間の間で数度見たこ

とのあるもの。エミヤお兄さん怒ってますよの合図だ。これが目の前に現れたら最後、その説教が終わるまで逃れられないと言う最強対人宝具。またの名を『そこに直れ』と言う、地獄の技だ。

ノーキヤンセルが基本で、稀にセレビィがエミヤに構って攻撃をした時のみ中断される可能性のあるそれだが、ここは生憎のポケモンセンター。夜も更けて人気がないとは言え、カスミやジョーイもいる。人目のある場所に中々出たがらないあのポケモンが助けてくれる奇跡など、考えるまでもない。

「エ、エミヤ？ 話そう？ 話さないと人間はわかり合えないって言ったのはエミヤだろ？」

「ああ、話すとも。まずは病室へ移ろうか？ そこでじっくりと話を――」

と、突然サトシにとってタイミング良く、ポケモンセンター中に警報が鳴り響いた。

何事かとエミヤたちは周囲を見渡せば、トキワシティへ何者かが侵入したと言う。それも巷で騒がれるポケモン誘拐事件の犯人の可能性がある、とも。

困惑するサトシたちで唯一事態に対応しようとモンスターボールに手をかけたエミヤの、その目の前に、天井の窓硝子を割って二つのボールが投げ入れられてきた。

ボールは床に当たると中からドガスとアーボが飛び出してくる。どちらもどくタイプポケモンであり、ドガスは早々に煙幕を室内に撒き散らし始めた。

「何なんだこれは!？」

いきなりのことに動転するサトシたちへ、答える声はすぐ傍からかけられた。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えてあげるが世の情け」

「世界の破壊を防ぐため」

「世界の平和を守るため」

「愛と真実の悪を貫く」

「ラブリーチャーミーな敵役」

「ムサシ！」

「ゴジロウ！」

煙幕の間からキリツと決め顔を向けてくる、赤髪ロングの女と、バラを持つ青髪の男。

何処かから盛大な音楽が聞こえてくるが、さてはて一体何処からか。

「銀河を駆ける ロケット団の二人には」

「ホワイトホール白い明日が待つてるぜ」

「ニヤーんでな！」

極めつけに、最後に登場した化け猫ポケモン・ニヤースが喋って決めポーズ。

思わず彼らの口上を呑気に見ていたエミヤは、ハッと正気を取り戻した。

「I am the bone of my sword.  
Steel is my body, and fire is my  
I have——」

「つて、あんたは何意味不明なこと言い始めてんのよ!？」

「いや、自己紹介されたからにはこちらもお返ししなくては失礼だろう? ……な?」

「何が『な?』なのよ! 全っ然わかんないわよ!」

と思っただが全然正気ではなかった。

口上への返しとして自分を表す詠唱を返すくらいには混乱していた。

こういったノリの悪役とかあまり周りに居なかったからネ。是非もないネ。

「さて、我らの狙いはポケモン」

「オレのピカチュウに手を出すな!」

「ピカチュウ? 我らの狙いはそんなじよそこらの電気ネズミではない」

「とびつきり底抜けに珍しいポケモンだけだ」

ピカチュウを庇うサトシへ、ロケット団は小バカにしたように言う。

「待って！ そんなポケモン、このセンターにはいないわ！」

「ここには、病気や怪我のポケモンいっぱい。根こそぎ頂いていけば、珍しいポケモンもいるかももしれない」

「何だか頭に來たぞ」

「同感だ」

ムサシの言葉に眉を寄せたのはサトシだけではない。漸く本調子に戻ったエミヤが、彼らを庇うように前に一歩踏み出した。

「弱きものを狙うとは、風上にも置けん小悪党だ」

「何が来ようと」

「怖くない」

「にやーも猫に小判！」

「それはどうか？ ヘルガー！」

エミヤはボールを投げてヘルガーを呼び出した。

飛び出てきたヘルガーは空中で一回転し、力強い脚を持って着地する。そして鋭い眼光でロケット団たちを睨み付けた。

「な、何だあのポケモン!？」

「見たことにやいポケモンにや！」

「もしかして珍しいポケモン!？」

「なるほど。程度の知れる輩だな」

色めき立つロケット団に、エミヤは肩を竦めた。

以前の旅で、エミヤはロケット団と真つ向からぶつかつたことがあつた。その時の経験から、彼らが下つ端であると当たりをつけたのだ。

さらに、カントー地方では珍しいが、ジョウト地方ではヘルガーはメジャーなポケモンであるため、そこまで珍しくはない。それを知らないと言うことは、彼らはカントー地方の外へ出たことのない蛙と言える。

「ここは私が引き受ける。君たちは避難したまえ」

「でも！」

「心配はいらないさ。あれ程度が相手なら、朝まで時間を稼ぐこともできそうだ」

エミヤの実力は知っている。

リーグへは出ていないが、ジムバツジを所持しているのだ。決して弱くはない。だが、だからと言って彼だけを残して逃げることは、サトシたちに躊躇いを与えた。

その葛藤を知ってかどうか、エミヤは彼らに背を向けたまま、ふと何でもないことのように言葉を続けた。

「ああ。時間を稼ぐのはいいが——別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう?」

その時、サトシは始めてエミヤと出会った時のことを思い出した。

絶体絶命のピンチに颯爽と現れた赤い背中。

身の丈以上に大きなポケモンに対し、その身一つで立ち向かったその姿を、サトシは今も色褪せることなく覚えている。

その時に見た背中と、今日の前にある背中が重なる。

「わかった!、こっちは任せろ!」

サトシはカスミとジョーイを連れて奥へと駆け出した。

未だカスミたちは不安そうに後ろを振り返るが、サトシはただ前だけを向いて駆けて行く。

不安がることはなにもない。

その背中は、間違いなく正義の味方なのだから。

## 2話―b さらば、ポケモンセンター

『別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう?』ですって。バカにしてくれるわね」

ムサシは案外上手い口調真似を披露し、眉間に皺を寄せる。そこにはありありと不快感が現れていた。

「ならば、我らロケット団の恐ろしさをしかと受け止めよ!」

「そうだな、貴様ら相手なら、朝までと言わず昼まで持ちそうだな」  
向けられた薔薇に、エミヤは払うような仕草で返す。

明らかに認識を改める気のないエミヤの態度は、ロケット団に行動を起こさせるきっかけとして十分だろう。

「後悔してももう遅いにや! お前ら、やってやるにや!」

「ドガース、ヘドロこうげき」だ!

「アーボは、たいあたり」よ!

喋るニヤースが吠えると同時に、コジロウとムサシがポケモンへ指示を飛ばした。

状況は二対一。不利な立場であるのは間違いなくエミヤの方であつたが、ヘルガーに焦りの表情は全くと言つていい程に見られない。

ただ真つ直ぐに、その凜々しい佇まいを崩さず、襲いかかって来る毒のヘドロとアーボを冷静に捉えている。そうしていられる理由は他にもない――傍にエミヤが居るからだ。

だからこそ、エミヤはその期待に応えるために口を開く。

「ヘルガー、避けて、めざめるパワー」だ」

ロケット団と比べれば平坦で落ち着きのある指示。それに従い、ヘルガーはすぐ傍まで迫っていたヘドロとアーボを、一つ跳ねるだけの軽い身のこなしで躲して見せた。そして身を翻し、アーボの無防備となつている背中へ、めざめるパワーを命中させる。

技の勢いにより床へ叩きつけられたアーボは、そのままカウンターへ滑るようにバウンドする。技の威力と床に叩きつけられた衝撃は、

相当なダメージをアーボへ与えただろう。

しかし、ポケモンはこの程度で倒れるような柔な生き物ではない。追撃しようと、押さえ付けるように襲いかかってきたヘルガーを紙一重で躲したアーボは、直ぐ様体勢を整え、広がったヘドロ口を避けてムサシの前まで後退していく。

状況はバトル開始前と同じものへ戻ったが、先まであったロケット団の余裕が薄れている。たった一瞬の駆け引きで、彼らはエミヤがただの格好付けでないことを察したのだろう。

ヘルガーはカウンターへと乗り上げると、フンと得意気な顔をして見せた。その態度は「私のマスターは、アンタたちに負けないくらいに凄いんだから」と自慢するかのであり、そして相手を見下すような、絶対的自信の現れのようにもあつた。

「チツ、なーんかあれムカつくわ」

「にやーたちを明らかに蔑視しているのにや」

「ならばドガース！　　“えんまく”で視界を塞げ！」

「ドガース」

コジロウの指示により、煙幕が濃くなり視界が一層悪くなる。

手を伸ばせば指先が見えぬだろう程のそれに、エミヤは口許を覆ってロケット団を睨み付けた。しかし、流石のエミヤも、この煙幕には太刀打ちできない。後手に回る他なくなってしまった。

英霊の力を持ってしても、エミヤは元々凡人である。語り継がれる英雄のような透視能力など、欠片も持ち合わせていない。合わせ、ヘルガーは犬型であるため鼻が利く方ではあるが、ドガースの煙幕はただの色の付いた煙ではなく、体内で生成される毒ガスである。その毒はヘルガーの鼻を麻痺させ、敵の補足が出来ない程の阻害効果をもたらしていた。

故に、この環境はエミヤたちを圧倒的不利へ追いやっている。

予想より頭が使えるらしいロケット団に、エミヤは警戒を強めた。

「気を緩めるな。必ず仕掛けてく——」

「シャーボッ！」

「キャウ!？」

エミヤが警告をしたその時、煙幕から飛び出して来たアーボがヘルガーに「まきつく」を仕掛けた。完全に不意を突かれたヘルガーは、太い胴により絞められる首から細い声を上げ、カウンターの傍にあるパソコンを巻き込んで転がり落ちる。

「ヘルガー!?!」

エミヤは辛うじてその姿を視認した。

何とか四肢で体を支えるヘルガーだが、その胴と首にはアーボが巻き付いている。

黒い毛皮に浮くその毒々しい紫色。思わず、エミヤは煙幕の向こうを睨み付ける。

俗に、蛇の締め付ける力は一〇〇キロを越えるという。九メートルを越えるものは五〇〇キロにも達するとされており、その力を持って豹やワニすら補食の対象とされる。ポケモンであるアーボにそれが参考になるかはわからないが、全長二メートルに六キロ程の蛇にしては小柄な種族だからと樂觀視することはできない。何故ならば、アーボとエミヤの知る蛇との大きな違いは、この人の腹部程はあろう胴体の太さだ。まるで御伽噺に出てくるように蛇の怪物——いや、ポケモンは「モンスター」と言われている。ならば、彼らは《怪物》で間違いないだろう。

その怪物が、エミヤの常識を越えた力を持っていてもおかしくはない。

「大丈夫かヘルガー!?!」

アーボを振り退かそうとするヘルガーだが、そこにエミヤの呼び掛けに応える余裕はない。

苦しそうな声を漏らすその喉はアーボに容赦なく絞め上げられ、ついには膝を折ってしまった。

「はい、ヘルガーちゃん確保ー」

「見たか！　これが我らロケット団の恐ろしさよ！」

「これでボスもお喜びになるにゃ」

用意周到というか、流石は悪事を働く者たち。

何処かから取り出したガスマスクをしっかりと嵌めるロケット団



は、煙幕の中から上がるヘルガーの悲鳴に満足気な表情を浮かべる。当然、煙幕とガスマスクに阻まれるエミヤにそれは確認できないが、その声だけはしっかりと届いていた。

故に、一転して冷静な声が彼らへ向けられる。

「だから貴様らは小物だというのだ！ ヘルガー “カウンター” だ！」

「グルルル、ガウー」

途端、ヘルガーの体が光り輝き、アーボを弾き飛ばした。

アーボが自分たちの足元まで吹き飛ばされたことに、色めき立っていたロケット団は目を白黒させる。

今ヘルガーが使った技 “カウンター” は、物理攻撃をダメージ倍にして相手にも返すことのできるものだ。 “まきつく” 自体のダメージは低い、予想していなかった反撃にロケット団の動きを怯ませるには十分の効果を発揮する。

その隙をついたように、エミヤの腰に付いたボールからあるポケモンが飛び出して来た。それは小さな羽根を飛ばたかせ、淡い赤色の体をエミヤの前で踊らせる妖精——セレビィだ。

セレビィは妖艶な微笑みをエミヤへ浮かべると、両手を広げて舞うように背を向けた。

「な、なんにゃ!?!」

「何よこれ!?!」

「うわあつ!?!」

すると、大気は嵐のように荒れ狂い出した。

このロビーで唯一外への口が開いている天窓はあれど、無風状態であったその場に突如起こった暴風。それはロビー全体の煙幕を絡め取ると、まるで何かに押し出されるように天窓から外へと押し出された。

いや、「まるで何か」と言うのも可笑しい。ロケット団はまだしも、エミヤたちにはそれを起こしたモノが誰であるのか、十分に承知しているのだから。

「あ、あれは?！」

煙幕が晴れたロビー。そこにいつの間にか増えていたポケモンを見て、コジロウが狼狽える。

暴風——「サイコネシス」の犯人であるセレビィは、コジロウの反応を見て逃れるように顔を逸らすと、ヘルガーの乱れた毛並みを整え、麻痺した鼻を慰めるように撫でる。ヘルガーはそんなセレビィに甘えるように擦り寄っていた。

その姿は仲の良い家族。種族は違えど、大きさは逆でも、エミヤにはそれが母と子どものように映った。そして、だからこそ、セレビィが飛び出して来た理由を察する。

「い、いきなり二体目を出すにやんて卑怯にやのにや!」

「フン、ならば貴様らこそが『卑怯者』と罵られるべきではないかね?

だが安心しろ。二対一であることに変わりはない……と言うか、何故喋っている?」

普通に流していたが、ここで漸くエミヤはニヤースへツツコミを入れた。

エスパークタイプが人語を解してテレパシーで語りかけてくる例は、エミヤも覚えがある。覚えがある、がそれはエスパークタイプに限った話。ニヤースはノーマルタイプ。エスパークタイプ技を覚えはずれど、喋ることができるようになる技はなかったはずだ。

興味津々ながら動揺の見て取れるエミヤの様子に、ニヤースは俯いた。

「これには深く長いワケがあるのにや。それこそ一話分くらいによ」

「二十四分か。それは中々に興味深いな……」

「そう、あれは映画を見たことが始まりにや——」

「はーい、ネタバレはそこまで!」

「今はそれを語る時ではない!」

話が逸れた所を、ムサシとコジロウが修正にかかる。

彼らの言う通り、今はニヤースの過去について馳せる時ではないだろう。ハツとなったエミヤとニヤースは、再度互いへの警戒を強める。

ニャースの過去編が気になる人は、カントー編第六十七話『ニャースのあいいうえお』を御視聴下さい。

それは捨て置き、気を取り直したエミヤに応えるように、ヘルガーに代わってセレビイが前へと進み出てきた。

そこに怯えの表情は一切なく、明確な敵意が浮かび上がっている。

「セレビイ、サイコキネ——」

さて、仕切り直しだ。

エミヤがセレビイへ指示を出そうとした、その時。

「エミヤーーーーー!!」

「ピーカーー!!」

サトシが、ロビーへと戻って来た。

何故か、大量のピカチュウたちと一緒に。

さらば、ポケモンセンター

時は少し遡り、エミヤがロケット団の足止めをしていた頃、避難したサトシたちはモンスターボールの保管室まで来ていた。

ジョーイはニビシティのポケモンセンターへ緊急連絡を取り、モンスターボールを転送して保護してもらえるように動いている。それを手伝うように、サトシとカスミも追っ手を警戒しつつ手伝っていた。

「うわあ、ピカチュウだ!」

「あんなに沢山! かわいい!」

その途中で、ガラス窓で隔たれる隣室に、ピカチュウが数体居るのを発見した。

ジョーイ曰く、自家発電用のでんきタイプポケモンとして待機しているピカチュウたちであり、停電時には彼らが場繋ぎを行ってくれるそうだ。それに感心していると、仕事もなくのんびりしていたピカチュウたちの一体が、不意にサトシたちの方を見上げてきた。

そのピカチュウはとことと窓へ近付き、縁を伝って隣室を覗き込んでくる。視線は、未だストレッチャーで眠るピカチュウへ向かって

いた。

「……ピカチュウ……」

連れられて、サトシも己のピカチュウを見る。

治療は完了しているため、後は目を覚ますのみであるが、ロケット団の襲撃でも目を覚ます様子は見られなかった。

それだけ疲労が蓄積されており、負担をかけたのだと、守れなかったのだと思うと、サトシの胸は心配とやるせなさで一杯になった。

このまま目を覚まさなかったらどうしよう。

せつかく仲良くなれたのに、もう一緒に居られないかもしれない。

まだまだ、ピカチュウと一緒に沢山旅をして、沢山いろんなものを見たい。

だって、オレたちの旅は始まったばかりなんだから——！

「ちよつと！…なんて顔してんのよ?!」

落ち込んでいたサトシを奮い立たせたのは、カスミの声と熱だった。

左の頬が熱い。

見れば、今日で何度目になるだろう。険しい顔をしたカスミが、眉間に皺を寄せてサトシの頬を叩いた右手を握り締めていた。

「貴方がピカチュウのトレーナーでしょ。トレーナーが自分のポケモンを信じないでどうするの！」

「……でも」

「でももへちまもない！ そんな不安そうな顔してたら、ピカチュウもおちおち休めないでしょう！」

「……うん。ありがとう」

そうだ、オレがしっかりしなくちゃ！

サトシは自分でも両頬を叩き、不安を払拭する。

「友達になれたんだ。友達が頑張ってるのに、オレがくよくよしてちゃ情けないよな」

先とは違う、強い意思の灯った瞳を見て、カスミはやれやれと肩を竦める。

このエミヤの弟分だというトレーナーは、彼と比べて随分と未熟ら

しい。新人トレーナーらしいと言えばらしいが、これではこの先が不安だ。

ポケモントレーナーはメジャーな職業であるが、同時に挫折者が多いことでも有名なものでもある。思うようにポケモンが育たない、バトルに勝てない、リーグに出られない、などと理由は様々で、諦めた元トレーナーたちの受け皿が不足していることが、実は少しだけ社会問題となっていたりもする。

そんな脱落者の中にサトシが埋もれるのを、カスミは見たくないと思っただ。

だって、彼はピカチュウを本気で心配していた。沢山傷付けて、あんな重症にさせて、トレーナー失格とすら言える程の状況にピカチュウを追い詰めたけれど、サトシはピカチュウを本当に心配して、早く元気になって欲しいと思っっている。

それは自分のポケモン<sup>道具</sup>だからとか、愛玩動物だからとか、そんな理由ではないことは見てわかる。

サトシは、ピカチュウを『友達』だと呼んだ。

ポケモンを対等な立場で見れるトレーナーが、この御時世どれだけ居るだろうか。サトシのようなトレーナーが珍しいわけではない。それでも、ポケモンをただの道具のように扱うトレーナーも確かにいる。

カスミは、そんな奴等が嫌いだった。

実家がジムであり、水中ショーをやっていることも合わせ、彼女は物心つく前からポケモンと生活してきた。そんなカスミにとってポケモンを単なる道具として見るなど論外だ。

だから、サトシを励ました。

頑張っただけだから、諦めないで欲しいから、この新人トレーナーの尻を叩いてやった。

「まったく、心配で目が離せないんだから」

「ん？ 何か言った？」

「なーんも」

微笑みを浮かべるカスミに、サトシは首を傾げる。その様が何処か

で見たような気がして、エミヤを思い起こさせたことに気付いたカスミは、ますます笑みを深くする。

こう言う所は、兄貴分とそっくりらしい。

将来彼の近くにいる女性は苦勞しそうだ、と勘繰るカスミだが、当然そこに自分が含まれるとは思っても見ていなかった。

「ピカッ」

「ん？」

気が付けば、隣室からピカチュウたちが大移動して来ていた。

わざわざ扉まで回って来たようで、黄色い塊たちは団子になっていそいそとストレッツチャーへよじ登っていく。

「な、何してんの？」

害意は感じない。それどころかピカチュウを気遣っている様子が窺い知れるため、サトシもカスミもただそれを戸惑いつつ眺める。

彼らの動揺に気付いたジョーイは、液晶画面から顔を上げて振り返る。

「もしかして、ピカチュウを心配して来てくれたのかしら？」

よいしょ、よいしょ、どっこいしょ。

みんなで協力し、最後の一体はジョーイが持ち上げて、全部のピカチュウがストレッツチャーの上に乗り上げる。

もうどれがサトシのピカチュウなのか。一応機器を装着しているのかわかるが、ここまでピカチュウのみが集まれば壯観である。

つまり可愛い。

「ピカピカ？」

「ピーカピカ」

「ピチュピカカ」

ピカチュウたちはピカチュウたちで、ピカチュウを囲みながらピカチュウ語で何やらピカチュウ同士で話し始める。もうピカチュウが並び過ぎてゲシュタルト崩壊しそうだ。

サトシたちは当然何を話しているのかわからず、三人揃って首を傾げた。

「ピーカーー!!!」

「ピーカー!!」

その時、一体のピカチュウの掛け声に呼応して、ピカチュウたちが一斉に放電を始めた。

「うわ!？」

「きゃあー!」

眩しさに思わず顔を覆ったサトシたち。放電はすぐに止み、恐る恐るそこを覗けば、ぴよこん、と尻尾を立ち上げるピカチュウの姿があった。

そのピカチュウは機器を頭に付け、体の至る所に掠り傷をこさえている。

「ピカチュウー!」

それはサトシのピカチュウだった。

駆け寄るサトシの声に反応して、ぴこぴここと忙しく動いていた尻尾を下ろし、ピカチュウは振り返る。

「ピカピー!」

サトシの姿を認めると、ピカチュウは喜色を浮かべてストレッチャーを蹴り、迎え入れてくれた胸へ飛び込んだ。

サトシもピカチュウも、互いを離さないようにぎゅうぎゅうと抱き締め、その存在を確かめ合う。

伝わる熱は、ぽかぽかとあたたかかった。

「よかった。もうすっかり元気になったみたいね」

「ところで、何がどうなったの?」

カスミがストレッチャー上のピカチュウとサトシのピカチュウを交互に見れば、ジョーイが「もしかしたら」と答えてくれた。

「体の中の電気が空っぽだったのかもしれないわ。それで君のピカチュウは起き上がるだけの力が出せなかったの。それをうちのピカチュウたちが充電してあげたんじゃないかしら?」

その通り、とピカチュウたちが頷く。

「そっか。ありがとう、みんな」

「ピカピカ!」

「よかったわね」

「うん！」

カスミに頷くサトシの腕から離れ、ストレッチャー上で体の動きを確認したピカチュウは、それから嬉しそうに周りのピカチュウたちと尻尾を合わせる。

もうすつかり元通りのようだ。

「よし！ こうしちやいられない！ 行くぞピカチュウ！」

「ピッカ！」

「え?! 何処行くのよ!?!」

「エミヤを助けに行くんだよ！」

「ええっ!?!」

元気になったなら是は急げ。

ピカチュウと一緒に出口まで駆けるサトシは、カスミが止めるのも聞かずに保管室を飛び出して行く。その後を他のピカチュウたちも追いかけて、部屋にはカスミとジョーイの二人だけが取り残された。

「というワケで、助けに来たぞエミヤ!!」

「ピピカ、ピイカ！」

「ピピカピカチュウ!!」

「何がというワケか全然わからんがめっちゃ癒されるな!!」

えっへん、と現れたサトシと大量のピカチュウたちに、エミヤは何度目かの混乱状態になった。

さつきまでの殺伐とした空気は払拭され、技を中断したセレビィはどうしたもんかとエミヤの前でふよふよと浮いている。

ロケット団もロケット団で、逃げたはずのトレーナーが大量のピカチュウを引き連れて堂々と戻って来たため、身構えて固くなっていたのから思わず脱力してしまう。

「なーんか、よくわかんないけど」

「鴨がネギ背負って来た感じ?」

「こうにやったらあのピカチュウ全部頂くにや！」

「そうはさせるか！」

「ピカーチュウ！」

「ピピカピカピカピカー!!」



「はにやにやにやー!?!」

ロケット団が標的をサトシたちに移すと、ピカチュウたちが一齐にまた放電を始める。その電撃はロケット団へ向かって行き、ムサシとコジロウ、そしてアーボとドガースに直撃した。

何とか難を逃れたニャースは、黒焦げになった彼らに情けないとため息を吐く。

「どいつもこいつも。にやらば出番だにや。ネズミはにやーの好物だにや!」

ニャースは不敵に笑って近寄ってくる。その自信満々な様に、僅かに怯むサトシだが、ピカチュウが何やら声をかけてきた。

「ピツカ、ピカピカピカー」

「ぴかぴか?」

「ピツカ」

「ぴか、もつとぴか?」

「ピツカー!」

「もつとぴか! そうだ、ピカチュウつと」

「どんな会話だ」

エミヤは弟分とピカチュウとの間で交わされる謎の会話に突っ込むが、聞こえないとばかりにスルーされてしまう。その肩を、セレビイはぽんつと一つ叩き、ヘルガーはお利口さんにも足元で待機する。

エミヤは仕方ないとばかりに肩を落とした。いい所を取られる形ではあるが、エミヤたちの役目はもうお仕舞いらしい。

サトシはピカチュウのリクエストに応え、今まで放置されていたカスミの丸焦げ自転車に跨がった。

意外なことに、この自転車、まだ導線が生きていたようで、サトシがペダルを漕ぎ始めるとライトが点灯した。そのライトの上へ、ピカチュウは軽やかに乗り上げる。

「にやんだ!?!」

「ピカチュウがネズミだからってナメんなよ! オレのピカチュウの本当の力を見せてやる!」

「ピカピカ、ピカチュウー!!」

自転車のライトから電気を吸収し、ピカチュウが電撃を放つ。

それは今度こそニヤースごとロケット団に命中し、その圧倒的な勢いにエミヤも思わず感嘆な声を上げてしまう。

「ぎやにやにやにやつ」

「はわわわわわわわつ」

「うわあああああつ」

「どがーす!!!」

あまりの威力に、堪らずドガースは体内のガスを大量に吐き出した。

そして電撃はそのガスに引火し——ポケモンセンターは吹っ飛んだのだった。

「あーらま、派手にやった……」

その様子を、駆け付けて来たジューサーは眺める。

人知れず、とある勘違いをした悪党共は、夜空の彼方へ飛んで行った。

その翌朝。

昨夜の騒動が嘘のような、鳥ポケモンの陽気な囁ずりに包まれるトキワシティだが、その中心にあるポケモンセンターは、それはそれは無惨な姿となっていた。

その無惨な中で、唯一無事であったパソコンで連絡をとる女性たちの姿がある——ジョーイとジューサーだ。

『トキワシティのポケモンは、無事回収したわ』

「ありがとう姉さん。二人とピカチュウはニビシティに向かったわ。でも、その手前にはトキワの森が……」

「大丈夫よ。あの子たちならトキワの森くらい」

「そうね、きつとね!」

そんな和やかな会話をする彼女たちへ、そつと近づく少年。

「報告は無事終わりましたか?」

「ええ、片付けを手伝ってくれてありがとう、エミヤくん」

「手伝ってくれて助かるわ。ありがとうね、エミヤくん」

「いえいえ、これくらい。弟の仕出かした不始末は、兄が拭うものですから。それより、少し休憩しましょう」

エミヤは瓦礫を退かして作ったスペースに設けられた、何処かから引つ張り出してきた——勿論投影した——お茶会席を指さし、暖かい紅茶の入ったポットを揺らして片目を瞑る。

随分とやり慣れていているらしいその仕草は、気障ったらしいにも関わらず少年に違和感をもたらさない。

「徹夜で疲れたでしょう？ お茶にしませんか？」

「ルルビィ〜」

一足先に用意された朝食を掴まむセレビィは、朝焼けに落ちそうな頬を照らさせる。

そのあまりに可愛らしい、しかし不似合いな光景に、ジョーイとジューサーは互いに顔を見合わせるが、すぐに笑みを浮かべて足を動かす。

「そうね、ちよつと疲れたわ」

「わーい、久々にまともな朝食よー！」

サトシたち同様、先を急ぐのはエミヤも一緒だが、それは困っている人を置いてまでのものではない。

ジョーイたちのカップに紅茶を注ぎ、エミヤは焼き立てのパイを切り分けた。断面からはトマトソースとチーズが溢れ、食欲を刺激する香りが広がる。

わつと上がった歓声。それを満足げに耳にするエミヤは、瓦礫の影に隠すように置いたオーブンを風に浚わせた。

## 幕間 EMIYA'S キッチン

クチバシテイ。カントー地方でも一位二位を争う大都市であり、大きな港があるため国外からも人の行き交いが多い流通の街である――が、今回の舞台はここではない。

その街が徐々に小さくなるのを眺めつつ、シンオウ地方行きのクルーズ客船内のレストランにて、エミヤとセレビィは昼食を楽しんで居た。

バイキング形式で各種料理が取り揃えられているそれは、どれも目移りしてしまう程にエミヤたちの目を楽しませてくれる。その中からセレビィの興味を引いたものを、バランスを考えながら皿へ取ったエミヤは、珍しいものを見るようにセレビィを見て居た。

この（一応）エミヤのポケモンである色違いのセレビィは、くどいようだが、とても人懐っこいとは言えない臆病な性格をしている。この二年半程は殆どモンスターボールの中で過ごし、人目がない時以外には逃げるように閉じ籠っていた。慣れているのは、トレーナーであるエミヤと、世話になっていたマサラタウンの人々くらいのもので、その性格は今も変わってはいない。

しかし、それがどうだ。

トキワシテイでの一件以来、セレビィは何故だかボールへとは戻らず、常にエミヤの傍に寄り添っている。

人見知りなのは相変わらずで、すぐにエミヤの背後へ隠れたりするが、それでも今までを思えば快拳とは言える変化だ。

はてさて、一体何の心変わりか。人がとやかく言うものではない、と好きにさせていたエミヤだが、人心地付いたこともあり、そのワケを漸く訊ねてみることにした。

「君にしては珍しいことだな」

「ビィ?」

「人目のある場で出ていることについてだ」

「ルビィ。ルルルルビィ」

身振り手振りで己の変化を伝えようとするセレビイに、エミヤは「なるほど」と律儀に頷く。

英霊と言うものは得てしてそうなのか、世界に召し上げられた故か、言葉の壁が薄く、言語翻訳に困ることはない。もしかすると聖杯の恩恵によりそうであるだけで、本来は生前の知識に偏るのかもしれないが、生憎エミヤは聖杯戦争類での召喚以外では殆ど他人と関わることがないため、そうであると判断は下せない。そもそも、今回のエミヤは聖杯戦争に召喚されたサーヴァントでもないため、ますますその辺りの事情を窺い知ることはできないでいる。しかし、どちらにせよ、今のエミヤは言語に不足はなく、また何となくではあるが、ポケモンの言葉もわかる状態だった。

これも霊基に負荷がかかった代償か、それとも時渡りのせいか、原因はわかっていないが、とりあえず困るわけではないため、ランクの低いスキルが付与された程度の認識で流している。

そのポケモン語翻訳スキルによれば、セレビイの心変わりの一つは、サトシのピカチュウだそうだ。

「羨ましくなった？」

と言うのも、サトシのピカチュウはボール嫌いなものもあり、常に外に出て過ごしている。それはつまりサトシトレーナーと常時一緒に過ごすことであり、また同じ景色、同じ感触をリアルタイムで共有することができる。加えて何よりも、常に、トレーナーと、ベタベタできる！

正に天才的発想！

不幸か幸いか、エミヤでは後半の部分を聞き取ることができなかつたようで、ご機嫌なセレビイに首を傾げていたが、とりあえずボールの外に出ていることがセレビイに何らかのメリットを与えていることは察したらしい。

セレビイは幻のポケモンであるため、ハンターやら何やらに狙われやすく、本当ならボールの中に居てもらった方がエミヤにとっても守りやすいのだが……決して守り切れないワケではない。自分が気を付けていればいいだろう。

「おっとセレビイ。頬にソースが付いてしまっている。取ってやるか

らじつとしていたまえ」

まあいいか、と好きにさせておくことにしたエミヤは、セレビイの頬に付いているソースを取ろうと、テーブルに置かれたペーパーナプキンに手を伸ばした。

白いレース状の物を長方形に折り畳んだ上品なそれは、オーナーの細部までに及ぶこだわりを感じさせる。

そこで、エミヤはたと気づく。

「……………凛のことばかり言っただけなら……」

セレビイの頬を拭いた後、いそいそと手持ち鞆の中身を確認したエミヤは、己が師より受け継いだらしい悪手に思わず天を仰いだ。

何たる失態。

これでは人のことばかり言っただけなら居られないだろう。

セレビイは打ち拉がれる己のマスターを不思議そうに眺め、それからその元凶を覗き見て……少し困ったような表情を作る。

そこにはうっかり渡し忘れた届け物——サトシのトレーナーカードが入っていた。

幕間 EMIYA'S キッチン

「今日はポフィンを作ろうと思います」

「ビィー！」

やや濁りのある瞳をしたエミヤは、一人（正確にはセレビイも居るが）誰も居ない部屋で宣言する。

場所はレストランから移り、乗客向けに公開されている自由利用の給湯室に来ている。

しかし、ここは世界の違いのためか、この給湯室は二畳程のスペースにコンロ一つと水道が付いただけの、そんじよそこらにある給湯室ではない。

エミヤが居るのは、十数名は入るであろう、ほぼ厨房のような給湯室だった。

シンオウ地方にはポケモンコンテストなる、ポケモン自体の魅力を

競う大会がある。それにより、ポケモンコーディネーターと呼ばれる職業が生まれ、彼らがポケモンのコンディション調整のために使用するポフィン、あるいはポロックと言うお菓子は、ポケモンコンテストに出る者にとって必要不可欠な必需品とされている。

つまり、シンオウ地方行きであるこのクルーズ客船には、そういったコーディネーターがポフィンなどを自作できるスペースが設けられているのである。

出発した船をわざわざ降りてサトシの元へ向かうことを諦めたエミヤは、シンオウ地方へ到着するまでの間、暇潰し兼気分転換がてらポケモン用のお菓子を作ることにしたらしい。

淀みなく鍋やらヘラやらと道具を投影していくエミヤを脇に、セレビィはアシスタントとして木の実を用意する。

「さて、今回は何を作ろうか」

手持ちの好みを思い出しながら、エミヤは先ず生地作成に取りかかった。

卵を壊して入れておいたボールへ、薄力粉とベーキングパウダーをふるいにかけて、粉をきめ細かくしたものを入れる。その後にはモーターミルクを少しずつ加えながら混ぜ合わせ、パサパサ感がなくなれば、次に味の決め手となる木の実を入れていく。

因みに、エミヤの元居た世界常識的に、動物への過剰な塩分等は毒であるため、ポケモン用のお菓子であろうと、自作の際に砂糖やバターは使わないようにしている。

一作目に入れるのは、辛さと渋みの強いマトマの実と、渋みと甘味があるブリーの実だ。

マトマの実はまるでトマトのような真っ赤で刺々した形をしており、ブリーの実は小振りの葡萄のような濃い藍色をした木の実となっている。それらは小さな一口大に整えられ、セレビィによってボールの中へと加えられていく。実を壊さないよう、切るように混ぜれば、生地に紫色が浮かんできた。

生地の出来映えに満足そうにエミヤは頷くと、次に鍋の置かれたコンロに火を付ける。

鍋へヘラを使いながら余すことなく生地を入れれば、次に焦げ付かないようにゆつくりとかき混ぜ始めた。

ポフィンの肝は生地で作成ではなく、仕上がり手前の火にかける工程とされている。

焦げたり溢れれば、それだけ味が損なわれ、舌触りも悪くなる。

全体に火が通るよう、しかし焦らずじっくり混ぜ、ヘラから伝わる触感と焼き加減の色味から完成を予測する。

もうエミヤの瞳に、濁りは見られなかった。

あるのは職人として、真摯にポフィンの向き合う情熱のみ。

この三年、各所で出会った料理の担い手たち。彼らと繰り広げた熱い語らいは脳裏を過り、エミヤの背を押し上げる。

目指す栄光の「美味」へと一歩踏み出して行く——だが、まだ手は届かない。

当然だ。この世に完成された頂点の「美味」とは、存在せぬ幻他ならないのだから。

「味」とは、それを口にし、感じた本人にしか得られぬもの。それに優越を付け、尚且つ順位付けするともなれば、それはもはや「美味」の追究ではなく、「神の舌」を求めるようなもの。

それは料理人のすることではない。料理人が求めるものではないのだ。

料理人<sup>彼</sup>が求めるは、料理を楽しむ者たちのみ。

料理を味わい、胃に納め、笑顔で「美味しい」と告げてくれること。そのなんと幸福なことか。

故に、エミヤが求めるは、ただの「美味」でなく「万人の美味」である。

忘れるな。イメージするのは常に最強の料理人<sup>自分</sup>だ。

喩えそれが幻想であり、到底叶わぬ理想であろうと、その願いは——決して、間違いなんかじゃないんだから……!!

「フツ、完成だ」

平皿の上に飾られた、紫に色付くポフィン。

それをドヤ顔&カツコイポーズでセレビィに披露するエミヤの、



その背中 of のなんと逞しいことか。とても小学校上級生、あるいは中学一年生程度の見た目とは思えない気迫！

これが彼の騎士王を射止める腕を持つ男というものなのか！

調理実習三年間無敗記録は伊達じゃない！

「ふむ、悪くない出来だな」

「ルリルリル〜♪」

ポフィンを一つつまみ、その味と舌触りを確かめれば、エミヤの食べかけを一口食べたセレビーも頷いた。

同時刻、客室に置かれたモンスターボールがカタカタと揺れたのは、はたして気のせいか。

そんなことを当然知らないエミヤは、ポフィンの検分を続ける。

外はさつくり、中はしつとりとしたそのポフィンは、形の残ったフルーツの食感もあり、なかなか舌を楽しませてくれる。甘さも後を引かず控えめで、ミルクティーに合うだろう。またはブランデーを加えて焼き、ストレートを合わせるのもいい。

ナナカマド研究所への土産に、人用にマフィンを焼いて行こう。そう予定を組み立てながら、エミヤは次の木の実を手にとった。

「さあ、次はモモンの実で作ろうか」

「ルルビ〜！」

ところで、クルーズ客船の給湯室は解放されているため、エミヤ以外の利用者が居ることは不思議でも珍しいことでもない——ということとは、当然誰もが知っていることだろう。

「あら？ あれは……」

そのため、何かしらの用事でそこへ立ち寄った彼女が、貸し切りのような給湯室でポフィンを作り続けるエミヤを見付けたことは必然的な結果であった。

何が楽しいのか、鼻で歌いながら珍しいポケモンと一緒に調理するエミヤを、彼女はそっと見守るように入り口から眺める。

その人は美しい女性であった。

黒のコートに毛先にまで手入れの行き届いたブロンドのロングヘア。微笑ましいものでも見たかのように細められた瞳は銀で、まるで

黒曜石を思わせる。

「へー、こつち戻つてたのね」

焼き上がったポフィンを食べさせ合いっこし、それぞれ笑みを浮かべる彼ら。

女性も嬉しそうに顔を綻ばせ、そこで一步部屋へと踏み入った。

「久しぶり、エミヤくん。少しみない間に大きくなったわね」

「！ 貴女は！」

声をかけられたエミヤとセレビイは、顔を上げて目を見開いた。

給湯室へ入って来たのは他でもない。シンオウ地方にて長年頂に座り続けるチャンピオン——シロナだった。

## 26話 タمامシジム危機一髪

グラシデアの花を知っているだろうか。主にシンオウ地方に生息する植物で、そのピンク色の花は誕生日や記念日などに感謝を伝えるため、ブーケにして相手へ贈ることがある。

シンオウ地方からカントー地方へ戻ったエミヤは、それをドライブラワーにしてバスケットに詰めた籠ブーケを手にタمامシシテイを歩いていった。セレビイはすっかりその香りを気に入ったようで、籠を抱える腕にぴったり張り付き楽しんでる。セレビイの色味が似ているため、端から見れば花の妖精のようだ。

「まったく、相変わらず騒がしいな……」

そんなセレビイに癒されながらも、エミヤの眉間には谷が作られている。

無理もない。この街に入ってから既に三度、エミヤはセレビイの交換をトレーナーから申し込まれているのだから。当然断っているのだが、それに逆上してバトルを吹っ掛けられれば、苦言の一つや二つも溢れるだろう。

ヤマブキシテイとは違った都会であるタمامシシテイは、主に若者が闊歩しており、デパートやゲームセンターが繁盛しているためか、暗くなり出している今もこどもの姿が多く見られる。それが関係しているのかはわからないが、どうも我慢強い者は少ないようで、思い通りにならないければ喧嘩になっている姿がちらほら見られ、彼もそれに巻き込まれた口であった。

勿論全ての住民がそうではなく、実際エミヤがこれから会いに行くのは折り目正しい人物である。

「また彼女の世話になってしまったが、いい土産物を選べたな。君もそう思うだろう?」

「……ビィ……」

「ん? どうした、そんな苦い声など出して?」

「ビィビィ」

気にするな、と首を振られれば、あまり触れるべきではないのだろ

う。

今度は厳しい顔で花を睨み出したセレビィに首を傾げ、エミヤは横断歩道の前で足を止めた——と不意に、向かいを歩く一組の親子が目にとまった。

一人娘だろうか。オレンジのワンピースにピンク色の大きなリボンを頭に飾る少女と、赤髪で和服の女性、それからふつくらとした腹の中年男性の一行は、エミヤの向かう方向へ進んで行く。

目的地は女性に人気な場所であるため、彼らに不審な部分があるわけではないが……妙に気になる。はて、自分にあのような知り合いが居ただろうか。あまり記憶力に対する自信がないのを自覚しているだけに、エミヤは首を傾げた。

「ビ……ビィ〜〜ィ」

「あ、こちら！ セレビィ！」

横断歩道が変わった途端、意を決したようにセレビィがエミヤの腕から飛び出した。突然のその行動に、エミヤは慌てて追いかけるが、それよりもセレビィの方が一步目的を果たすのが早かった。

「わあっ!？」

なんと、セレビィはいきなり件の少女に襲いかかった。エミヤはぎよつと目を見開く。セレビィのトレーナーになってから、イタズラ目的以外にこんな光景は見たことがなかったからだ。しかもあの人見知りのセレビィが、見ず知らずの他人に、である。

エミヤは天変地異の前触れか、と戦いたが、すぐに少女の違和感に気付いた。ズレたのだ。少女のブロンドの髪が、セレビィに引っ張られてずりつと。

「待て、まさか君……」

「わああー!!」

「おりやー!!」

「ちよつとお話ししようねえー!!」

「え、ええええええ!？」

ズラだ。カツラを少女がしている。彼女の——否、彼の地毛は黒髪なのだろう。

そうなるとその子どもの顔が知り合いに似ているように思えた。エミヤがそれを指摘しようと思ったが同時、彼は少女の付き人たちに羽交い締めになれ、ビルの隙間へと連れ込まれてしまっていた。

一体何事か!?

目をパチクリするばかりであるそっくりなトレーナーとポケモンを、人目のない所まで連れ込んできた奇妙な三人は、そこで漸く一息を吐いた。

「あ、危なかったわ……」

「まさか完璧な変装を見破る奴が道中に現れるとはな……」

「また縛られるのは勘弁にや……」

「な……き、貴様らは!?!」

なんとということでしょう。エミヤの前に現れた三人組の内の二人——否、何故か腹からニヤースが顔を覗かせ現れた。故に二人と一体は、エミヤが見たことのあるトリオであった。未だ忘れられない。あのポケモンセンター爆発事件の一端を担うロケット団だ。

となれば、彼らと一緒にいた少女に扮する子どもも怪しくなる。エミヤが確認しようと思えば、観念してカツラを手につつスカーフをはいた少年がいた。そしてエミヤはまたもや驚愕をあらわにする。

「何をしているんだサトシ!?!」

「うう……これには深いワケがあつて……」

そう、そこには彼の弟分であるサトシが居心地悪そうに立っていたのだ。

エミヤは地味にショックを受けていた。変装していたとは言え、自分が可愛がつている弟分を見分けられなかったのだ。しかも、人見知りであるセレビイに見破るのを先越された。兄貴分としての自覚があつただけに、プライドがちよつと傷付いた。

そんなことでエミヤが落ち込んでいるとは欠片も思わないサトシは、セレビイにスカーフを引っ張られたりされながら、しどろもどろに何があつてこうなつたかの説明をする。サトシの言い分では、ある店で香水に文句を言ったところ、そのオーナーであつたジムリー

ダーを怒らせてしまい、ジムに挑戦できなくなってしまったそうだと。しかしポケモンリーグに挑戦するためには、最低でも公式ジムバッジが八個必要だ。駆け出しの新人トレーナーであるサトシには、一つでも落とすことはできないし、それがジムに挑戦する以前の問題が原因ともなるとやるせない。そんな彼の前に現れたのが、ジムの裏に吊し上げられていたロケット団の面々であり、彼らの協力の下、変装してジムに乗り込もうとしていた最中であつたらしい。

話を聞いて、エミヤは頭を抱えた。

どうしてそうなつた。

「……まず、サトシ」

「なんだよ」

「香水と言うものは女性のみならず時に男性も使用するし、またポケモン用の物も開発が進んでいる。ひとえに香水とは誘惑するためのものではないし、料理に使用することもあつて、その用途は多岐にわたっている」

「た、たき？」

「使い方がたくさんあることだ。たしかに、この地方では香水はあまり普及していないから、お前にとって馴染みのないものだろう。習慣などが原因だったりするんだが、そこは置いておくとして、海外では香水を付けていることが普通であつたり、場合によっては化粧品類よりも多く所有していたりする」

「へー、そうなの」

「知らなかつたぜ」

「博識にやー」

「外野は黙っていたまえ。いいかサトシ。よつて、馴染みないものだからといって無闇に指摘することは失礼に当たる行為であり、それが女性相手だなんでもつてのほかだ。お前ももう成人したのだから、今後気を付けるように。いいか？ わかつたな？ わかつたなら、二度と、女性に、そう言った、ことを、言うな。い・い・な？」

「え……う、うん……わかつたよ……」

「……私も一緒に謝りに行こう……」

ガシリと肩を掴まれ、あまりに鬼気迫るエミヤの様子に、とりあえずサトシは素直に頷いておいた。この兄貴分は自分より広い世界を廻り、多くの知識を持っている。そんな彼がそうまで言うのだからそうなのだろう、と理解はできておらずとも思ったからだ。

サトシの返答を得て、エミヤはガツクリと肩から力を抜いた。これ絶対わかってない。しかしいつまでもここで説教をしている場合ではない。次にエミヤの頭を占めたのは、これから行こうと思っていた場所のことであり、そこはサトシの話と無関係ではなかった。

話が少しややこしくなった。バスケットを抱えるセレビイの頭を撫でながら、エミヤはどうしたものかと眉を寄せる。

「次にそもそも……何故、変装が少女なんだ……」

「これくらいの方がバレないのよ」

「思ったよりいい出来だろ？」

「実際に全然バレにやかったにや」

馴れ馴れしくも肩を組んできたムサシとコジロウに、エミヤ距離をとる。ニヤニヤとした表情を隠そうともしない彼らは、エミヤが見破れなかったことを揶揄っていた。

ぐっとエミヤは奥歯を噛み締めた。絶対に自分の方が彼らより修羅場を潜ってきた自負があるだけに、やはり見破れなかったことが悔しい。

「……………何故そんな高等な変装技能を有している……下っ端のくせに」

故に、エミヤはそう悪態を吐いた。

そしてそれが、ちよつと不味かった。

「ちよつと、誰が下っ端ですってえ！」

「そーにやそーにや！ にやーたちはロケット団の中でもエリート団員にや!!」

「これでも幹部候補（希望）なんだぞー！」

「自分で『これでも』とか言うのか……」

「ムカツときたー！ そこまで言うなら直に味あわせてやろうじやないのー」

「え？」

「にゃーたちの敏腕に酔いしれるにゃー！」

「ちよ、」

「そーと決まればデパートに戻るぞ！」

「うわ、何をする!?!」

「ほらジャリボーイ！ なにブーツとしてんの!?! 行くわよ！」

ロケット団はエミヤを担ぎ上げると、そのまま元来た道を駆け戻って行く。怒濤の展開に、とりあえずカツラを被り直したサトシはぱちくりとセレビイと顔を見合わせた。セレビイも、今までになかった自分のマスターがあっさり連行されていく様に唾然としている。

「……………行くか……………」

「ビイ……………」

### タمامシジム危機一髪

さて、サトシとロケット団という奇妙な集団に捕まったエミヤは、何故かその集団に執事として加わっていた。何故だ。

「いい、設定はこうよ！ 私とゴジロウとニヤースで入門しに来た娘の保護者役をするから、赤ジャリはジャリボーイの幼少からのお付き執事で、心配で付いて来た。オーケー？」

「待て、その『赤ジャリ』とはもしかしなくとも私のことか!?!」

「あんた以外に誰が居んのよ」

「白髪から捻るかで迷ったよなー」

「でも『レッド』はいろいろ不味い気がしたにゃ」

「……………貴様ら、そう言えばエリート団員だとか言っていたな？」

「私を知らないのか？」

突然変わった話題に、ロケット団の面々が顔を見合わせる。とりあえず彼らの頭にはエミヤに関する記憶など、以前のポケモンセンターでの件以外には見当たらないため、特には、と首を振っておく。エミヤもエミヤで、訊ねながらに詳しく説明せず、その反応に「そうか」とただ一つ頷いた。



「ねえ、まだあ？ もうジムが閉まっちゃおうよ！」

そこへ、今まで大人しくセレビィにスカートを引つ張られながら待っていたサトシが、眉を寄せて声をかける。彼の言う通り、デパートの大きな窓から見える空には星が見え出しており、そろそろ夕飯時であることを告げていた。時刻は七時を回っただろうか。

タمامシシティには流通の便が整っているのもあり、調味料の種類が多い。そうだ、今夜はカレーを作ろう。釜を投影してナンも作って、ハチミツで甘く仕上げるのも、中にとろとろのチーズを入れて焼くのも絶品だろう。

エミヤの思考が無意識に今夜のメニューについてへ移り、その隙を逃さなかったムサシとコジロウは、彼の両脇を固めてガツチリと自由を奪った。

「さあ、ジャリボーイのためにもジムへ向かうわよ！」

「そうそう！ ジャリボーイのためにな！」

「にやーす！」

「おい、待て！ そもそも私はあそのジムリーダーとは顔見知りで……」

「はーやーく!!」

ズルズルとエミヤの抵抗虚しく、着物の夫人と腹の出た中年男性、それから金髪のワンピース少女に白髪褐色肌の執事十色違いのセレビィと言った謎集団は、仲良く(?) タمامシシティの公式ポケモンジム——エミヤの目的地であったタمامシジムへと向かったのだ。た。

「久し振りだな」

「わあ、エミヤくんじゃない！ 今日はいじめかし込んで来たわね」

「ああ、実は昔に執事のバイトをしていてな。今日は雇い主の娘さんがこちらのジムに挑戦するというので、無理言っつけて付いて来させていたんだよ。ああ、そうだ。これ、エリカに渡しておいてくれ。先日世話になったと……」

「それならリーダーに直接渡してあげてください。その方がきつと喜ぶわ」

「それならそうさせてもらおう」

(ノリノリじゃん……)

何だかんだ言って与えられた役割をこなすエミヤに、サトシの頬は引き攣った。しかも何か慣れた動きでサトシをカウンターまでエスコートもしている。

手慣れてる。そう感想が面々の頭に浮かんだが、今はグツと堪えて執事に徹するエミヤの後を追った。

「いらっしやいって、エミヤくん！ こっちに帰っていたのね。この間はシンオウに居るって聞いたけど」

「つい先日はこちらへ戻ってな。あの時の礼をしたいと立ち寄ったら、昔世話になった方の御令嬢が初めてのジムに挑戦すると聞いて、それもタマムシジムだと言う。ならばせっかくの縁だ、と今回はこのような形で赴いたのだ」

「そうだったの。あなたが挑戦しに来た子ね？」

「は、はいっお——じゃなくて、私です！」

サトシがギクリと肩を固くさせ、顔を手で隠しながらに頷く。実はこのカウンターに居るスタッフ、サトシが問題を起こした店の店員でもあったのだ。昼の今であるため、確実に顔を覚えられているだろう。バレないように乙女のようなポーズをとった自分に「何やってんだオレ……」と内心でツッコミせざるを得なかった。

だがここで折れるわけにはいかない。とにかくバツジだ。

ここまですんなり入れたのだ。バトルも乗り越えればジムバツジが手に入る。そうなればこの女装ともおさらばして、元の姿に戻れる。我慢するのは今だけだぜ！

なんて、弟分が意気込むことなど知らずに、エミヤはその背中を「気合が入っているな」とばかりに頷いて眺めていた。

「おほほ。うちの子ったら人見知りで、だから女性がジムリーダーだと言うこちらからスタートするのぎます」

「ええ、ここのジムリーダーなら娘を預けるのも安心ですな」

「是非、娘をお願いしたいのでぎますの」

「はい、お任せください。とてもいいご両親ね」

「え、ええ……自慢の両親で、す……」

「おや、照れてしまったかな？」

「うふふ、かわいいですね」

「おほほ。自慢の娘がますから」

敏腕を見せると言っていただけあり、似ていない家族でありながら、ちゃんと家族であることがわかる演技を違和感なくロケット団はこなしている。

感心するようで複雑だが、エミヤは彼らの言う「エリート団員」に納得が行く思いを抱いた。

「あのー、リーダーのエリカさんはどちらに？」

とは言え、演技初心者であるサトシには中々難しい。ボロが出る前に進めようとスタッフにジムリーダーの所在を訊ねた。

スタッフが言うに、今は奥の温室に居るらしい。ではそちらへ、と移動しかけると、両親役のロケット団がいつの間にか背後から居なくなっている。ハツと後ろを振り向けば、彼らは少し離れた所に居た。「じゃあね、サトちゃん。パパとママはとつととお家に帰ってますからね。がんばるのよー」

「ンじゃなー」

「じゃーねえ」

そう言い残し、パツと壁の向こうへ身を引つ込める。

「あいつら、何やってるんだ？」

「……サトシ、これをエリカへ渡しておいてくれ。行くぞ、セレビィ」

「ビィ！」

「え、あつ待てよエミヤー！」

「あ、君たちー！」

明らかに怪しい。普通、立ち去るならば正面玄関から出て行けばいいだけだ。正体もバレていないのだから。であるのに、彼らは壁の奥へと姿を消した。そもそも何故ロケット団はサトシに協力したのか。双方は敵対しているのだから、何かしらのメリットがなければ……。

疑惑が拭えなかったエミヤは、バスケットをサトシへ押し付けてロケット団の後を追いかけた。

先ず前提からおかしいではないか。サトシの話ではロケット団はジムの裏に吊し上げられて居たと言う。ならば奴等はサトシと出会う前にジムから閉め出しを食らっていたと考えるのが妥当だ。だからサトシに協力して再度潜入を試みた。

(サトシがジムに挑んでいる間は、施設への人手が多少は減る)

その隙に何か行動に出るため、ロケット団はサトシたちから離脱したのだ。

そうとわかれば野放しにはできない。悪党なだけに着替えも足も速いロケット団の背中を追いかける。するとすぐにサトシが隣に並んで来た。いささか男らし過ぎる走り方のせいで、スカートがわっさわっささと捲れ上がっている。そのマナーのない様に後で説教をすることを、エミヤは密かに決意した。

「何があつたんだよ、エミヤ?!」

「ロケット団が動いたようだ。怪しいとは思っていたが、やはり何か裏があるな。私の前で悪事を働こうなど百年は早いぞ!」

エミヤは硬く拳を握る。

その時、ニヤースが離脱するのを見た。ムサシとコジロウから離れ、別行動に移ったようだ。そしてその小さな手に黒い塊があつたのを見て取ったエミヤは、見慣れたものであること奥歯を噛む。

「爆弾だどッ!」

「ば、爆弾?!」

「く、やむを得ん……サトシ、私がニヤースを追う! お前は前の二人を食い止める!」

「わかった!」

「セレビィ、サトシに付いてやれ!」

「ビィ!」

エミヤは素早く脇へ逸れ、ニヤースを追い駆ける。通路は一本道で、すぐに開けた部屋へと辿り着いた。

「うーん、ここでもいいかによー。周りに植物があつて、よく燃えそうによー」

「そうはさせんぞ、貴様」

「にや、にやにッ!？」

ニヤースが爆弾をセットしたのは、ジムのバトルフィールドであった。その地面に爆弾を埋め、周囲に火種が飛ぶことで火事を起こそうというらしい。くさタイプのジムであるため、周囲には木々や花々が多く植えられている。一度火を放てば、一瞬で火の手は建物を覆うだろう。

そして何よりも、ここはバトルフィールドだ。今この時、最もここを使う可能性が高いのは、ジム戦を挑みに来たサトシである。女装してまで挑み込んで来た挑戦者を、エリカは無下にはしないだろう。そして二人は必ずここでバトルを行う。爆弾が仕掛けられたフィールドの上で、だ。

「よくも騙してくれたな」

「騙されるおみゃーたちが悪いのにや! 悪いがにやーは逃げさせてもらにやにやにや!？」

言い捨てて逃げ出そうとするニヤース。その背に忍び寄る影があつた。

間一髪でそれを回避するが、その正体を見てもニヤースにはそれが何かはわからなかった。ポケモンであることはわかる。しかし、見たことのないポケモンだ。

まず目に付くのは、その鋭い切っ先だろう。鏡のように同じ姿をしているその二体は、西洋の短剣の姿をしていた。そして柄には赤紫の飾りが踊っている。一見ポケモンには見えない物のようだが、しかしそれは独りでに動き、エミヤの周りで踊るように浮いていた。

「ほ、ポケモン!？」

「この子も初めまして、か。カロス地方のポケモンだ。タイプははがね、ゴースト。ニダンギルと言う、二体で一体のポケモンだ」

「ギル!」

ニダンギルの柄を握り、構えるエミヤ。思わずニヤースは後退りする。

毛皮でわかりにくいのが、ニヤースは冷や汗を流していた。ポケモンセンターで感じたものとは違う、凄まじいプレッシャーが圧しかかっ

てくる。

「実はな、私は剣の腕——それも二刀流には、それなりに自負しているものがあるのだ。そこで、一つ提案がある」

ニダンギルの飾りがエミヤの腕に巻き付いた。それを合図に、エミヤは軽く一步ニヤースに近付く——エミヤはニヤースの目の前にいた。

「何枚に下ろされたい？」

「トレーナーが戦うとか反則にやー!!!」

場所は代わり——サトシはバスケットを一生懸命に抱えるセレビィと共に、ムサシとコジロウを追い駆けていた。彼らが向かっていたのは香水を作る場所だったらしく、追い詰めた頃には周囲を甘い香りが包み始めていた。

「ロケット団！ お前らの好きにはさせないぞ！」

「ゲツ、バレてた！」

「伝説の香水はオレたちのもんだー！ 行けどガースー！」  
「行くのよ、アーボ！」

ムサシが琥珀色の香水を片手にアーボを繰り出す。続けてコジロウもドガースを出し、二体のポケモンがサトシを威嚇した。

「ルリリリィ！」

そこへ守るようにセレビィがサトシの前に躍り出る。手には相変わらず大きなバスケットを抱えており、花に埋もれているように映るが、その可愛らしい花卉の奥から覗く眼は鋭く細められており、ポケモンの持つ闘争精神が燃えていることがわかる。

一緒に戦ってくれるのか！ サトシが眼で問えば、セレビィはコクリと頷いて答えた。ならば、とサトシもスカートを捲り上げて腰のホルスターから一つのモンスターボールを取り出す。

「フシギダネ、君に決めた！」

「ダネダー……ダネダネダ？」

セレビィの足元へ出て来たフシギダネだが、自分を繰り出したトレーナーを見て首を傾げた。

それも仕方ない。ボールから出てみれば、自分のトレーナーが面影

はあるもの見ず知らずの少女になっているのだから。

だれ？ ついでにこのポケモンもなに？

フシギダネは少女（サトシ）と淡い赤色のポケモン（セレビィ）を交互に見る。

「フシギダネ、オレだよオレ！ お前のトレーナーのサトシだよ！」

「ダネダ！」

サトシはカツラを投げ捨てた。ブロンドの髪から短い黒髪が現れれば、フシギダネは安心したようにトレーナーの名前を呼ぶ。そんな様子を眺めていたセレビィはバスケットをサトシへ押しやり、その背中へそつと体を隠す。

ひよっこり見え隠れする頭は、初めましてのフシギダネを気にしているようだが、目が合うとデイグダのように引つ込んでしまっていた。

「そういうえば、セレビィとな初対面だったっけ？ フシギダネ、こいつはセレビィだ。エミヤのポケモンなんだ」

「ダネネ？」

「あ、エミヤはわからないか。ていうかオレ、セレビィの技知らないんだけど……」

フシギダネがセレビィを追い駆け、セレビィがそれから隠れるように動くため、サトシの周りを二体のポケモンがくるくると踊っていた。そんな中心で今更ながらセレビィへポケモン図鑑を当てるサトシだが、画面に映ったのは「データなし」。

ポケモン図鑑は幾つか種類があり、主に地方毎に別けられている。そのため物によっては図鑑が発行された地域のデータのみしか取り入れている物もあった。新人トレーナーへ渡される物はその移動範囲から殆どがその図鑑であり、サトシも例に漏れずカントー地方版の図鑑を渡されていた。

つまりサトシの図鑑には、ジョウト地方の伝説として語られるセレビィのデータは書き込まれていなかったのだが、そんなことなど知らないサトシは、困ったな、と頭を掻いた。

「前にもこんなことあったけど……これじゃあセレビィの技がわから

ないよ」

「ビィ?」

「もしもーし、そろそろ準備終わったかしらー?」

えーっと、と頭を捻るサトシへムサシが声をかける。

律儀にも準備が整うまで待つていてくれたロケット団は、漸くアーボとドガースの前に構え直したセレビィとフシギダネに佇まいを正す。

「来ないならこっちから行くぞ! ドガース “たいあたり” だ!」

「ビィ!」

「ダネ!」

襲いかかるドガースとフシギダネの間へ割り込んだセレビィの体が、一瞬虹色に輝いた。と思えば次にはドガースが弾き返されており、セレビィが “まもる” を使ってフシギダネを助けてくれたのだと伝えてくる。

何が起きたのかわからなかったフシギダネだが、助けられたことを賢く理解した彼は、入れ替わるようにセレビィの前へと飛び出した。

「フシギダネ “つるのムチ” !」

「タダネ!」

「シャボツ!」

フシギダネのつるが躲そうとしたアーボの尾先を捕らえ、その動きを抑制して絡め取る。

「ダネダネダネダネ!」

「ジャボーツ!!」

「ドガースッ」

「うわっ!」

そしてそのまま大きくつるを振り回し、遠心力の力も乗せてロケット団の方へと投げ飛ばした。

アーボはドガースにぶつかり、そしてそのままムサシとコジロウを巻き込んで壁まで吹き飛ばされる。

「いぞフシギダネ!」

「ダネダネ!」



「ルリルリ！」

サトシが歓声を上げれば、当然だね、とフシギダネが顎をしゃくり、セレビイはすごいすごいと飛び跳ねながら拍手を贈る——その時、部屋の窓を突き破る影が二つ、勢いよく部屋へと飛び込んで来た。

一つは執事の格好をした少年で、もう一つは肩で息をするニャースだ。

ニャースは青ざめた顔で床を転がり、団子になっているムサシとコジロウの元へと飛び込んで行った。

「怖かったにやー！」

「ニャース！ 遅かったな！」

「どこで油売ってたのよ!!」

「それどころじゃにやかったにや！ 危うく三枚下ろしにされるところにや!!」

「そんな怯えずともいいだろう。ほんの冗談だ」

「あれはマジだったにや!!!」

ガタガタ震えるニャースへ、エミヤはにつこりと笑みを浮かべるが、余計に怖がらせる材料でしかない。案の定完全に頭を抱えて尻尾を立てさせたニャースに、他の面々は疑問符を浮かべるばかりであった。

「さて、ピンチ……というわけでもなさそうだな、サトシ」

「ああ、エミヤの方も大丈夫だったのか？ 両手に持つてるのってもしかしてポケモン？ そういえば爆弾はどうなったのさ?! あ、セレビイが凶鑑に載ってなかったんだけど、あいつってどんなポケモンなんだ？ 技ってどんなの？もしかしてくさタイプ？ でもエスパー技もつかうよな？」

「待て待て、一辺に訊くな。それよりも、まず先にやることがあるだろう？！」

「ギル」

チャキリ。握るのに合わせて鳴くニダンギルを構え直し、エミヤは揉みくちやになって部屋の隅に固まるロケット団へと近付いた。

ひいっとニャースから悲鳴が上がるが、その歩みに躊躇いは一切見

られない。

「やはりロケット団なんぞは信用できん悪党らしい。即刻退場してもらうぞ」

「せいなるつるぎ」。

眩い光が部屋一杯に広がる。

腰を落とした低い姿勢から繰り出されたその技は、見事にロケット団の足元に命中した。

ドンツ——ジム全体に響き渡る鈍い音の後、クサイハナを模した屋根を突き破り、夜空の星目指して飛んで行くものたちがいた。それはロケット団三人組がサトシを追い駆けるようになってから、お約束の退場方法である。

「トレーナーがポケモンの技直に使うって有りかよ!?!」

「にゃーはもう赤ジャリの相手はしたくにゃいにゃ!!」

「でもー、この伝説の香水はロケット団が頂いたわよー!」

「なーにー!?!」

サトシがハツと開かれたままの金庫を見れば、そこはもぬけの殻となっている。奴らの撃退は叶ったものの、狙いの阻止には失敗してしまっただけらしい。

既に星となって輝くロケット団を見送ってしまったサトシは、悔しそうに拳を握り絞め——エミヤはニヤリと笑みを浮かべていた。

「え、エミヤ様!!」

さて、騒ぎを聞き付けて惨事の現場へと飛び込んで来たタママシジムのリーダーであるエリカは、グラシデアの花のバスケットを受け取るエミヤを認めた途端、その白魚のように美しい肌をバラのように赤く染め上げたのであった。

「さ、サトシ!? お前こんな所でそんな格好して……なにやってるんだ?」

「しかもエミヤまで居るし」

「ピピカチュウ?」

「ぐっ……こ、これは……」

そんな乙女の脇では、サトシの旅仲間であるタケシとカスミ、それ

から相棒のピカチュウから不審な目を向けられる女装少年の姿があったりして、ちよつぴりおかしな空間となっている。そんな空間で女性への贈り物をするのもなんだが、と思いつつも、エミヤはエリカの元へと近寄り、バスケットを掲げた。

「シンオウの帰りに、土産を選ぶのにわざわざ君へ連絡をしてみましたらう？ その際には大変助かったので、お礼をしたいと思いますからね。君の受け売りのままだが、花言葉もピッタリだし、カントーでは珍しいグラシデアの花を君に渡したかったんだ。迷惑だったかね？」

「そんなつ、迷惑だなんて有り得ませんわ！」

「よかった。ああ、そうだ。ドライフラワーにしてももらったから、種は採れるはずだ。君なら綺麗に咲かせられるだろうし、新たな香りの助けにはなるだろうか？」

「まあ、嬉しい！ そんなに私わたくしを想って下さるなんて……花が咲いたら連絡いたしますから、よろしければ、その……また見にいらして下さいいな……」

「勿論だとも」

快いエリカの了解に、エリカの顔が綻ぶ。その表情はまさに恋する乙女のもので、ジムリーダーを務める厳格なトレーナーの影は成りを潜めている。そんな主人の姿に、スタツフたちは微笑ましい想いを抱いて見守っていた。

しかし、いつまでもピンクに染まっているわけにもいかない。

直ぐ様気を取り直し、咳払いをしたエリカは「ところで」と本題へ指をかけた。

「この有り様と、彼についての説明をさせていただいても？ 彼、ジムに挑戦しに来たという少女と特徴が似ているのですが？」

ジムリーダー足る者、盲目となることのないその眼差しは、まず穴の空いた天井を見て、それから次に窪んだ床、最後にワンピースを脱ぎ捨てるサトシへ向かう。

やはり何も聴かないでくれる選択肢などなかったか。欠片程度抱いていた望みを心の片隅から追い出しながら、エミヤは今日何度目の「どうしたものか」という枕詞を浮かべた。

さてはて、どうしたものか。

花では誤魔化されてくれる相手ではないし、それで収まるような惨事であれば、そもそもエリカがここに居るわけがない。誤魔化しなど不可能でしかないため、エミヤは心の中で手を上げて首を振った。

「うむ……実は言いくいのだが……」

「エリカ！ オレはなあ、お前と勝負するために——」

「呼び捨てにするな」

「アデッ！ ぐっ、と、とにかく！ こんな恥ずかしい格好までして忍び込んで来たんだ！ オレとポケモン勝負だ！」

こんな恥ずかしい格好として着ていたワンピースを突き出し、サトシはキツとエリカを睨む。しかし高々新人トレーナーのそれに怯むような柔でない彼女は、眉を僅かに寄せる程度で「そうですか」と一つ頷いた。

「挑まれた勝負は、受けなければなりませんわね」

「じゃあー！」

「ですが、その前に！」

意気込んだサトシの前で、エリカは両手を叩いた。

空気の破裂音により鼻白んだサトシの目に、ニコリとした彼女の笑顔が一杯に広がる。

「片付けをいたしましょう」

「あ、はい」

駆け付けたジュンサーに事情を説明し、スタッフたちと片付けを行った(爆弾はエミヤがこっそり回収した)サトシたちだが、結局「今日はもう遅いから明日にしろ」と言うエミヤの一言でジムへの挑戦は翌朝へと流れることとなった。そのため一度ポケモンセンターへと戻った一行は、その裏庭にて遅めの夕飯を口にして居た。

「カスミだけじゃなく、タケシもジム関係者なのか」

「ああ、今はポケモンブリーダーの修行中で、サトシの旅に同行させてもらっているんだ」

「ならお礼を言わなくてはな。見ての通りサトシは世間知らずなど頃が目立つ。これからも手がかかるだろうが、タケシが見守ってくれ

「ば安心だ」

「ちよつ恥ずかしいこと言うなよ!」

まるで親のように頭を下げるエミヤを、サトシが頬を染めて咎めるが、頭を下げられたタケシは任されたと頷いている。

「任せてよ! タケシだけじゃなくて、私も面倒見てあげるから!」

「カスミか……」

「え、カスミが?」

「なにその反応!」

タケシの隣で同じように頷くカスミ。それへエミヤとサトシが似たような表情で眉を寄せるものだから、堪らずカスミは拳を握った。

トレーナーたちが賑やかにしているテーブルの下では、セレビィとピカチュウが仲良く同じ皿のポケモンフーズを食べ、やれやれと首を振っていた。

「ああ、そう言えば、忘れるところだった」

おもむろにエミヤは腰の鞆から白いハンカチに包まれている、薄い長方形の物を取り出した。それは元々エミヤがサトシを追い駆けて来る原因のなった物である。

なんだなんだと覗き込む三人に見えるようにハンカチから取り出された物を見て、タケシとカスミが「あ!」と声を上げた。

「すまん。本来ならトキワシティで渡すはずだったんだが、すっかり忘れていた。気が付けばこんなに遅くなってしまったな」

「……………なにこれ?」

と云えど、渡された本人は頻りに首を傾げていた。

手に持つて表と裏を見比べている。

「あんた、これがわかんないわけ!」

「トレーナーカードだぞ!」

「ど、トレーナーカード??」

「……………」

たしかに、研究所から旅立つトレーナーにはポケモン図鑑が支給され、それがトレーナーの身分証明であるカードの役割をも担ってくれる。ポケモンリーグでの選手登録も図鑑で行えるため、図鑑があれば

トレーナーカードは使わないという者も居るだろう。現にサトシは旅立つてから不自由に思ったことは一度としてないのだから。

だが、しかし。今日この時まで渡せずに思い悩んでいたエミヤの苦労とは一体何であったのだろうか。うっかりにあれだけ落ち込み、シンオウ地方で用事を済ませたりしていた時も、頭の片隅では弟分が困ってはいないかとハラハラしていたのだ。お土産に悩んで知り合いの女性へ連絡していた最中でも、連絡の取りづらいサトシをどうやって捕まえるかと悩んでいたのだ。これでも。

それが当人の「なにこれ？」である。私の苦悩はなんだったのかと言いたい程の能天気な返答であった。

本日何度目か。もう額に手をやって深く大きなため息を吐いたエミヤは、ジロリとピカチュウとカードを覗き込むサトシを見た。

「……サトシ」

「……な、なにさ……」

(……あ、これ前にも見た)

カスミが既視感を覚えるその光景は、彼女がエミヤと再開したポケモンセンターでも見たものだ。

予想通り、額にあった手はサトシの肩へと移り、その細く小さな筋肉をビクリと跳ねさせる。

「サトシ、話をしよう」

余談であるが、一頻りサトシとのお話を済ませたエミヤだが、その晩は一睡もすることができずに朝を迎えることとなった。

その理由は些細なことで、いつもなら一緒に布団へ入るセレビイが何故か一度も目を合わせず、ついにはモンスターボールで寝てしまったためである。トレーナーとしてセレビイの機嫌が一日中何処と無く悪いことには気付いていたが、その理由がわからなかったためにどうしようもなく、わけもわからぬまま謝ることが得策でないことを十分知っている彼は、ひたすらボールへと引きこもってしまった相棒のご機嫌とりへ勤しむ破目になったのであった。

閑話休題。

ついでに、何処かの空き地の土管の中で、伝説の香水と銘打たれた

それを開封した三人組が居たそうだが、彼らはその中身がクサイハナの香りの原液だとは知らなかったそうだな。